

平成23年度ヒヤリ・ハット調査 「非常時(震災時)の危険」 (インターネットアンケート)



平成23年8月

東京都生活文化局消費生活部生活安全課

目 次

I 調査概要	1
1 調査の目的	1
2 調査の概要	1
3 調査の方法	1
II 調査結果	2
1 地震発生中・直後でのヒヤリ・ハット及び危害経験について	2
（1）地震発生時に揺れのあった地域にいたか	2
（2）地震発生時にいた場所の屋内／屋外区分	2
（3）地震発生時に建物の何階にいたか	3
（4）地震発生時にいた場所	4
（5）地震発生時の行動	5
（6－1）地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験の内容	7
（6－2）地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験時の状況	8
（7）地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験の程度	10
（8）ヒヤリ・ハット／危害経験に至った理由	11
（9）大震災発生以前に実施していた地震への備え	12
（10）転倒防止対策を実施していた家具類・家電製品等	13
（11）使用していた転倒防止対策器具の種類・有効性	14
（12）日頃から備えておけばよかったと思うこと・今回の震災を契機に行った地震への備え	15
（13）今回の震災を契機に購入した商品	17
（14）震災以降の物不足時の消費行動	18
（15）勤務先や学校などで実施している地震への備えが十分だと思うか	19
（16）勤務先や学校などで実施している地震への備え	20
（17）今回の震災で、建物・設備・使用していた製品等に関して危険性を感じたこと、不安に思っていること、困ったこと	21
2 帰宅中のヒヤリ・ハット及び危害経験について	22
（1）地震が発生した日の帰宅状況	22
（2）地震が発生した日の帰宅手段	23
（3）帰宅するまでに歩いた時間	24
（4）徒歩で帰宅する場合の経路の認知状況	25
（5）徒歩で帰宅中に、備えておけばよかったと思うもの	26

(6) 「災害時帰宅支援ステーション」の認知状況	27
(7) 「災害時帰宅支援ステーション」の利用状況	27
(8) 「災害時帰宅支援ステーション」の利用意向	28
(9-1) 帰宅中のヒヤリ・ハット／危害経験の内容	29
(9-2) 帰宅中のヒヤリ・ハット／危害経験時の状況	30
(10) 帰宅中のヒヤリ・ハット／危害の程度	32
(11) 地震発生当日に宿泊又は過ごした場所	33
(12) 勤務先や学校の、帰宅困難者に対する支援体制は十分だと思うか	34
(13) 勤務先や学校で備えている、帰宅困難者に対する支援体制	34
(14) 勤務先や学校などで不足している、帰宅困難者に対する支援体制	35
(15) 帰宅中又は宿泊中に知りたかった情報	36
(16) 帰宅中又は勤務先等での宿泊中に危険性を感じたこと、困ったこと	37
3 帰宅後のヒヤリ・ハット及び危害経験について	38
(1) 帰宅後の自宅の状況	38
(2) 在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所	39
(3) 在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた理由	40
(4) 在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所の対策状況	41
(5) 震災に便乗した悪徳商法や勧誘等の被害経験	42
(6) 外出先から帰宅後に自宅について危険性を感じたこと、困ったこと	43
4 計画停電中のヒヤリ・ハット及び危害経験について	44
(1) 計画停電の実施に関する情報の認知度	44
(2) 計画停電の実施に関する情報の認知媒体	45
(3) 計画停電経験の有無	46
(4-1) 計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害経験の内容	47
(4-2) 計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害経験時の状況	48
(5) 計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害の程度	49
(6) 計画停電に備えて準備していたこと・停電中に有効であった準備	50
(7) 計画停電に備えて準備をしておけばよかったと思うこと	51

I 調査概要

1 調査の目的

危害及びヒヤリ・ハットの経験をして、消費生活センターなどへ相談する人はごくわずか、商品やサービスに起因する事故情報は埋没してしまっている。しかし、これらの情報の中には重大な事故につながるものもあり、事前に対策を講じていれば、事故は防ぐことができたかもしれない。東京都では、このような危害及びヒヤリ・ハット情報をインターネットアンケートにより積極的に収集し、事故防止対策を実施していくために、ヒヤリ・ハット情報分析事業を実施している。

本調査は、非常時（震災時等）の事故の防止対策を図るための資料とするために、非常時（震災時等）における危害及びヒヤリ・ハット事例を把握すること及び消費者の要望・意見等を収集することを目的として実施した。

2 調査の概要

- (1) 調査実施期間 : 平成 23 年 7 月 19 日（火）～同年 7 月 21 日（木）
- (2) 調査対象の条件 : 都内に在住する 20 歳以上の男女
- (3) 調査対象の数 : 4,000 人
- (4) 調査対象の分布 : 年齢 5 階級（20 歳代、30 歳代、40 歳代、50 歳代、60 歳代以上）及び男女別にほぼ均等となることを目標とした。回答者の分布は以下のとおりである。

【回答者の年代別・性別分布】

上段：人数、下段：構成比

	計		
		男性	女性
合計	4,000 100.0	2,000 50.0	2,000 50.0
20歳代	800 100.0	400 50.0	400 50.0
30歳代	800 100.0	400 50.0	400 50.0
40歳代	800 100.0	400 50.0	400 50.0
50歳代	800 100.0	400 50.0	400 50.0
60歳代以上	800 100.0	400 50.0	400 50.0

3 調査方法

既存のインターネット調査モニターを対象としたインターネット調査によって実施した。

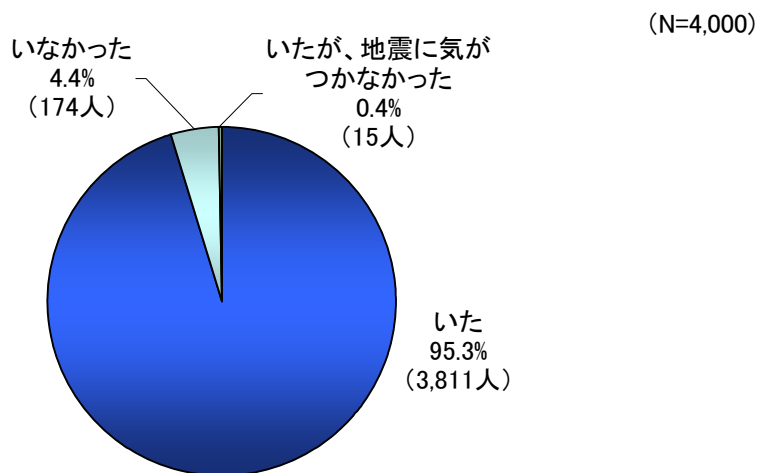
Ⅱ 調査結果

1 地震発生中・直後でのヒヤリ・ハット及び危害経験について

(1) 地震発生時に揺れのあった地域にいたか ※回答者：全員

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災が発生した時に、揺れのあった地域にいた人は 95.3%で、大部分の回答者は揺れを経験していた。

地震発生時に揺れのあった地域にいたか(単一回答)＜全体＞

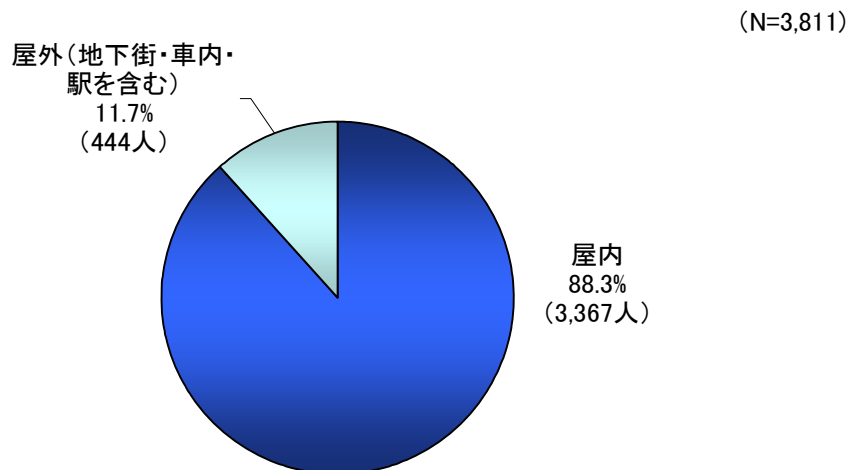


(2) 地震発生時にいた場所の屋内／屋外区分

※回答者：地震発生時に揺れのあった地域に「いた」と回答した 3,811 人

東日本大震災の地震が発生した時、屋内・屋外のどちらにいたかを聞いたところ、「屋内」が 88.3%、「屋外（地下街・車内・駅を含む）」が 11.7%であった。

地震発生時にいた場所の屋内／屋外区分(単一回答)＜全体＞



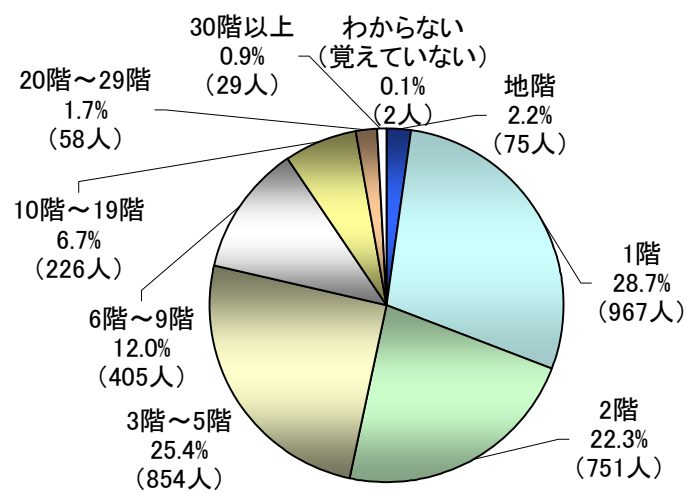
(3) 地震発生時に建物の何階にいたか

※回答者：地震の発生時に「屋内にいた」と回答した 3,367 人

地震が発生した時にいた場所の階数は、「1 階」が最も割合が高く 28.7%、次いで「3 階～5 階」（25.4%）、「2 階」（22.3%）の順となっており、1 階から 5 階までが 7 割半ばを占めた。

地震発生時に建物の何階にいたか(単一回答)<全体>

(N=3,367)



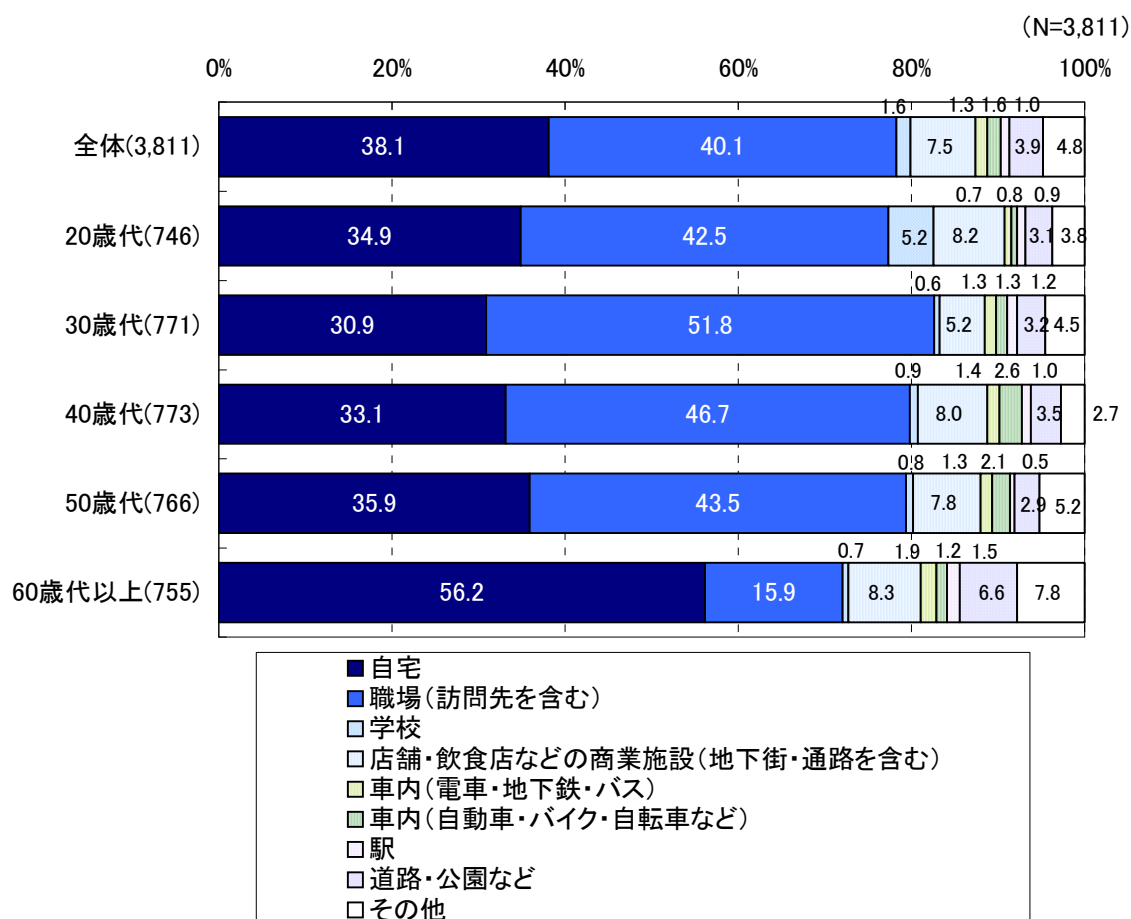
(4) 地震発生時にいた場所

※回答者：地震発生時に揺れのあった地域に「いた」と回答した3,811人

東日本大震災が発生した時、どこにいたかを聞いたところ、全体では「職場（訪問先を含む）」が最も高く 40.1%、次いで「自宅」38.1%、「店舗・飲食店などの商業施設（地下街・通路を含む）」7.5%の順であった。

年代別にみると、“30歳代”では「職場（訪問先を含む）」が51.8%と5割以上を占めた。30歳代以上は、年代が高くなるほど「自宅」と回答した割合が高くなっている。

地震発生時にいた場所（複数回答）＜年代別＞



「その他」の回答（上位抜粋）

Q4.「その他」の回答	件数		
病院	34	友人宅	9
実家	16	駐車場	7
スポーツクラブ	16	図書館	6
公共施設	11	ホテル	5
展示会場	9	幼稚園	4
		ゴルフ場	4
		子供の家	4

(5) 地震発生時の行動

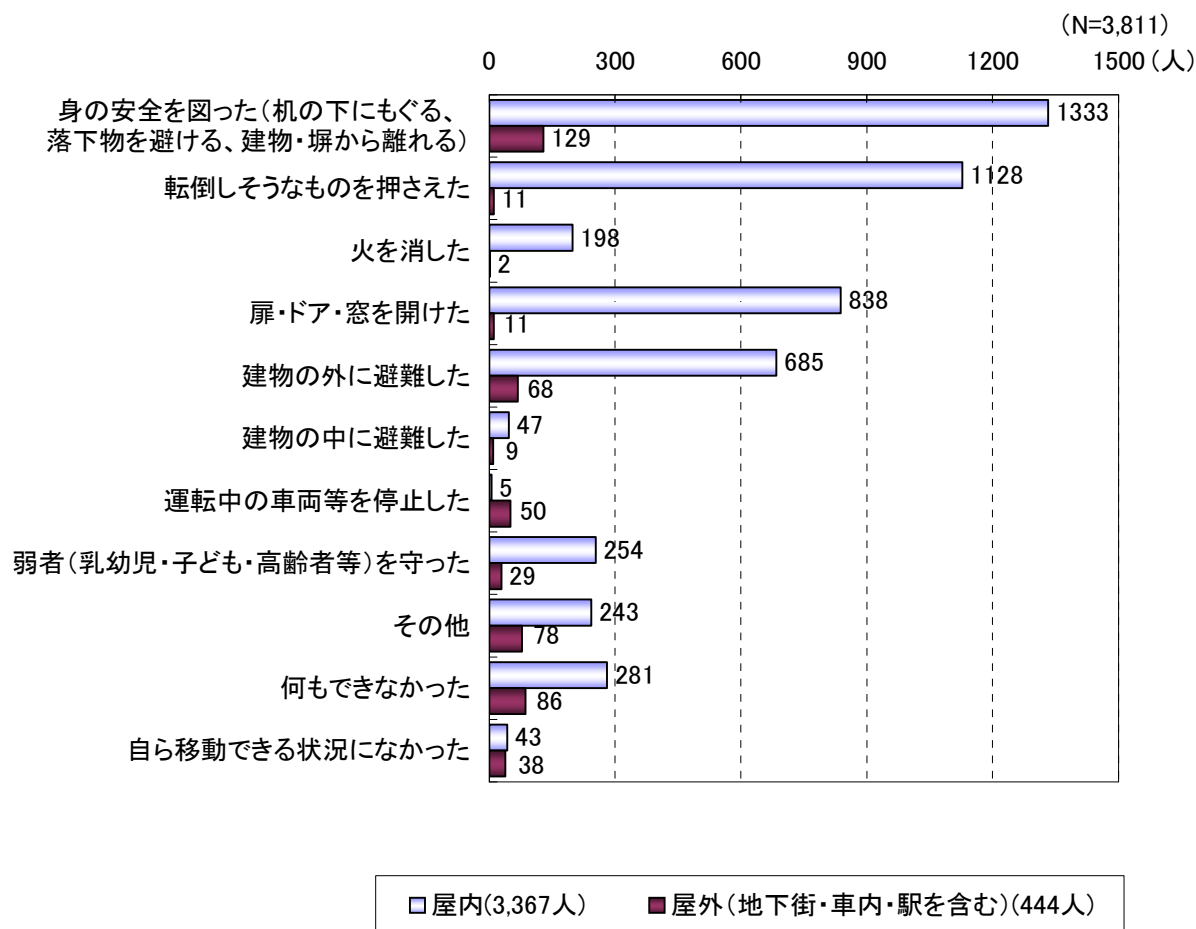
※回答者：地震発生時に揺れのあった地域に「いた」と回答した3,811人

東日本大震災が発生した時、どのような行動をとったかを聞いたところ、その時にいた場所（屋内／屋外）別にみると、“屋内”“屋外”いずれも「身の安全を図った（机の下にもぐる、落下物を避ける、建物・塀から離れる）」が最も多く、それぞれ1,333人（39.6%）、129人（29.1%）であった。次いで“屋内”にいた人では「転倒しそうなものを押さえた」1,128人（33.5%）、「扉・ドア・窓を開けた」838人（24.9%）、「建物の外に避難した」685人（20.3%）が続く。一方、“屋外”にいた人では「何もできなかった」が86人（19.4%）で2番目に多かった。

また、地震発生時に屋内にいた人について階数別にみると、地上階では階数が高くなるほど「身の安全を図った」の割合が高かった。

また、“1階”では「建物の外に避難した」人が3割であったのに対し、10階以上では1割未満となっている。

地震発生時の行動（複数回答）＜地震発生時にいた場所の屋内／屋外区分別＞



地震発生時の行動(複数回答)<地震発生時にいた場所の階数別>

		n	掘る、身の安全を図った(机の下にも 落下物を避ける、建物・ 塀から離れる)	転倒しそうなものを押さえた	火を消した	扉・ドア・窓を開けた	建物の外に避難した	建物の中に避難した	運転中の車両等を停止した	弱者(乳幼児・子ども・高齢者 等)を守った	その他	何もできなかった	自ら移動できる状況になかった
全体		3367 100.0	1333 39.6	1128 33.5	198 5.9	838 24.9	685 20.3	47 1.4	5 0.1	254 7.5	243 7.2	281 8.3	43 1.3
Q3	地階	75 100.0	26 34.7	11 14.7	3 4.0	8 10.7	19 25.3	4 5.3	0 0.0	4 5.3	10 13.3	7 9.3	5 6.7
	1階	967 100.0	305 31.5	242 25.0	87 9.0	283 29.3	294 30.4	12 1.2	2 0.2	104 10.8	76 7.9	85 8.8	17 1.8
	2階	751 100.0	264 35.2	281 37.4	43 5.7	203 27.0	166 22.1	8 1.1	1 0.1	63 8.4	61 8.1	53 7.1	5 0.7
	3階～5階	854 100.0	366 42.9	314 36.8	45 5.3	225 26.3	138 16.2	13 1.5	2 0.2	53 6.2	52 6.1	74 8.7	6 0.7
	6階～9階	405 100.0	202 49.9	168 41.5	13 3.2	78 19.3	51 12.6	5 1.2	0 0.0	16 4.0	22 5.4	31 7.7	5 1.2
	10階～19階	226 100.0	114 50.4	83 36.7	5 2.2	34 15.0	13 5.8	2 0.9	0 0.0	13 5.8	16 7.1	24 10.6	4 1.8
	20階～29階	58 100.0	34 58.6	19 32.8	2 3.4	6 10.3	2 3.4	1 1.7	0 0.0	1 1.7	3 5.2	5 8.6	1 1.7
	30階以上	29 100.0	21 72.4	8 27.6	0 0.0	1 3.4	1 3.4	2 6.9	0 0.0	0 0.0	3 10.3	2 6.9	0 0.0
	わからない(覚えていない)	2 100.0	1 50.0	2 100.0	0 0.0	0 0.0	1 50.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

地震発生時の行動(複数回答)<地震時にいた場所別>

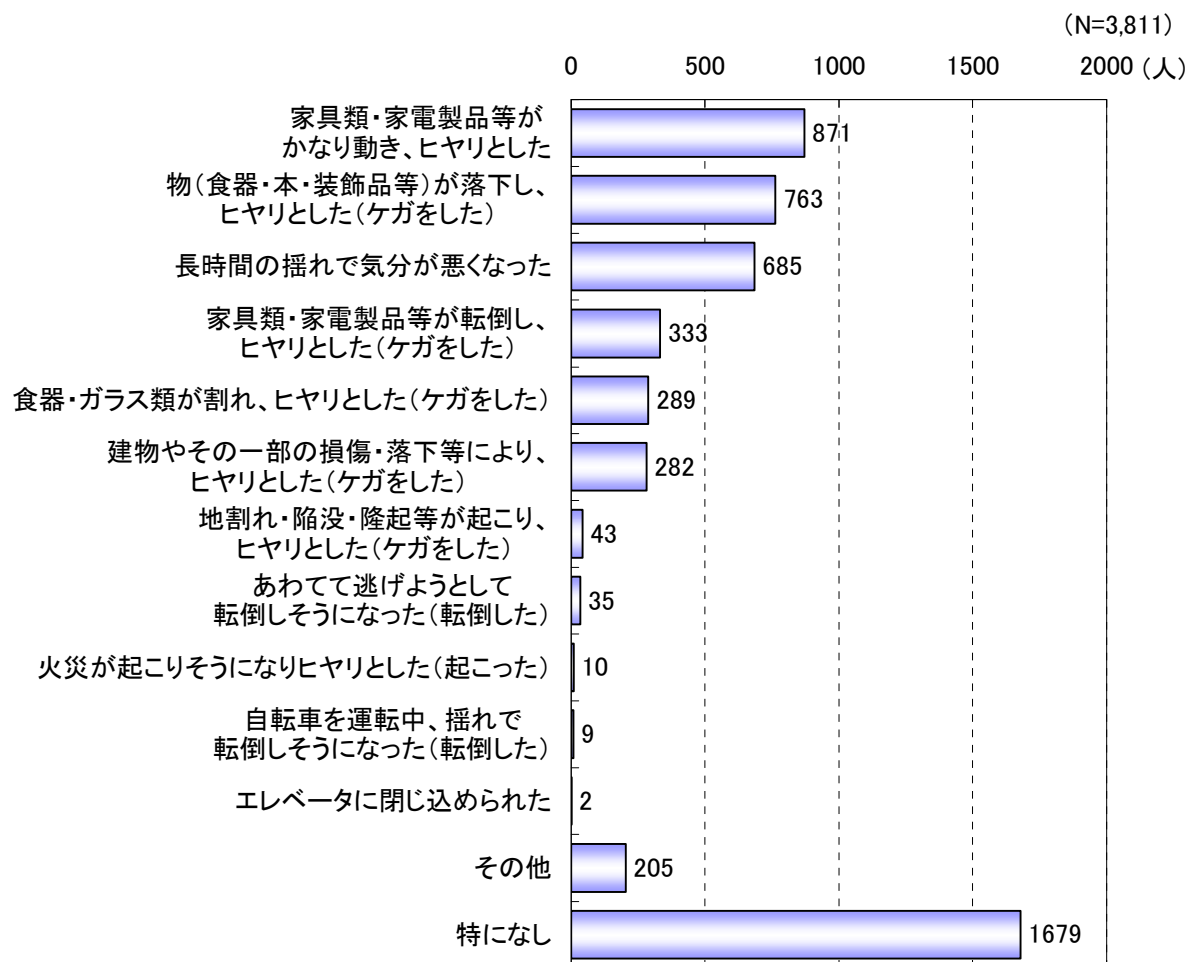
		n	掘る、身の安全を図った(机の下にも 落下物を避ける、建物・ 塀から離れる)	転倒しそうなものを押さえた	火を消した	扉・ドア・窓を開けた	建物の外に避難した	建物の中に避難した	運転中の車両等を停止した	弱者(乳幼児・子ども・高齢者 等)を守った	その他()	何もできなかった	自ら移動できる状況になかった
全体		3811 100.0	1462 38.4	1139 29.9	200 5.2	849 22.3	753 19.8	56 1.5	55 1.4	283 7.4	321 8.4	367 9.6	81 2.1
Q4	自宅	1453 100.0	458 31.5	652 44.9	163 11.2	522 35.9	185 12.7	14 1.0	2 0.1	174 12.0	121 8.3	104 7.2	9 0.6
	職場(訪問先を含む)	1530 100.0	745 48.7	431 28.2	27 1.8	282 18.4	363 23.7	22 1.4	5 0.3	52 3.4	85 5.6	130 8.5	16 1.0
	学校	62 100.0	29 46.8	10 16.1	1 1.6	9 14.5	20 32.3	1 1.6	0 0.0	10 16.1	5 8.1	4 6.5	0 0.0
	店舗・飲食店などの商業	286 100.0	96 33.6	24 8.4	5 1.7	12 4.2	125 43.7	13 4.5	2 0.7	11 3.8	26 9.1	31 10.8	9 3.1
	車内(電車・地下鉄・バ	51 100.0	5 9.8	1 2.0	0 0.0	0 0.0	2 3.9	0 0.0	3 5.9	0 0.0	11 21.6	7 13.7	24 47.1
	車内(自動車・バイク・自	60 100.0	4 6.7	0 0.0	0 0.0	1 1.7	0 0.0	0 0.0	38 63.3	0 0.0	5 8.3	12 20.0	3 5.0
	駅	39 100.0	15 38.5	0 0.0	0 0.0	0 0.0	11 28.2	2 5.1	0 0.0	2 5.1	5 12.8	8 20.5	0 0.0
	道路・公園など	147 100.0	54 36.7	2 1.4	0 0.0	0 0.0	7 4.8	2 1.4	5 3.4	17 11.6	29 19.7	42 28.6	3 2.0
	その他()	183 100.0	56 30.6	19 10.4	4 2.2	23 12.6	40 21.9	2 1.1	0 0.0	17 9.3	34 18.6	29 15.8	17 9.3

(6-1) 地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験の内容

※回答者：地震発生時に揺れのあった地域に「いた」と回答した3,811人

東日本大震災が発生した時（直後）に、「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があるかを聞いたところ、「特になし」という回答を除いた2,132人（55.9%）の人が何らかのヒヤリ・ハット経験をしていた。経験の内容は「家具類・家電製品等がかなり動き、ヒヤリとした」が871人（22.9%）と最も多かった。次いで「物（食器・本・装飾品等）が落下し、ヒヤリとした（ケガをした）」763人（20.0%）、「長時間の揺れで気分が悪くなった」685人（18.0%）が続いている。

地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験の内容（複数回答）＜全体＞



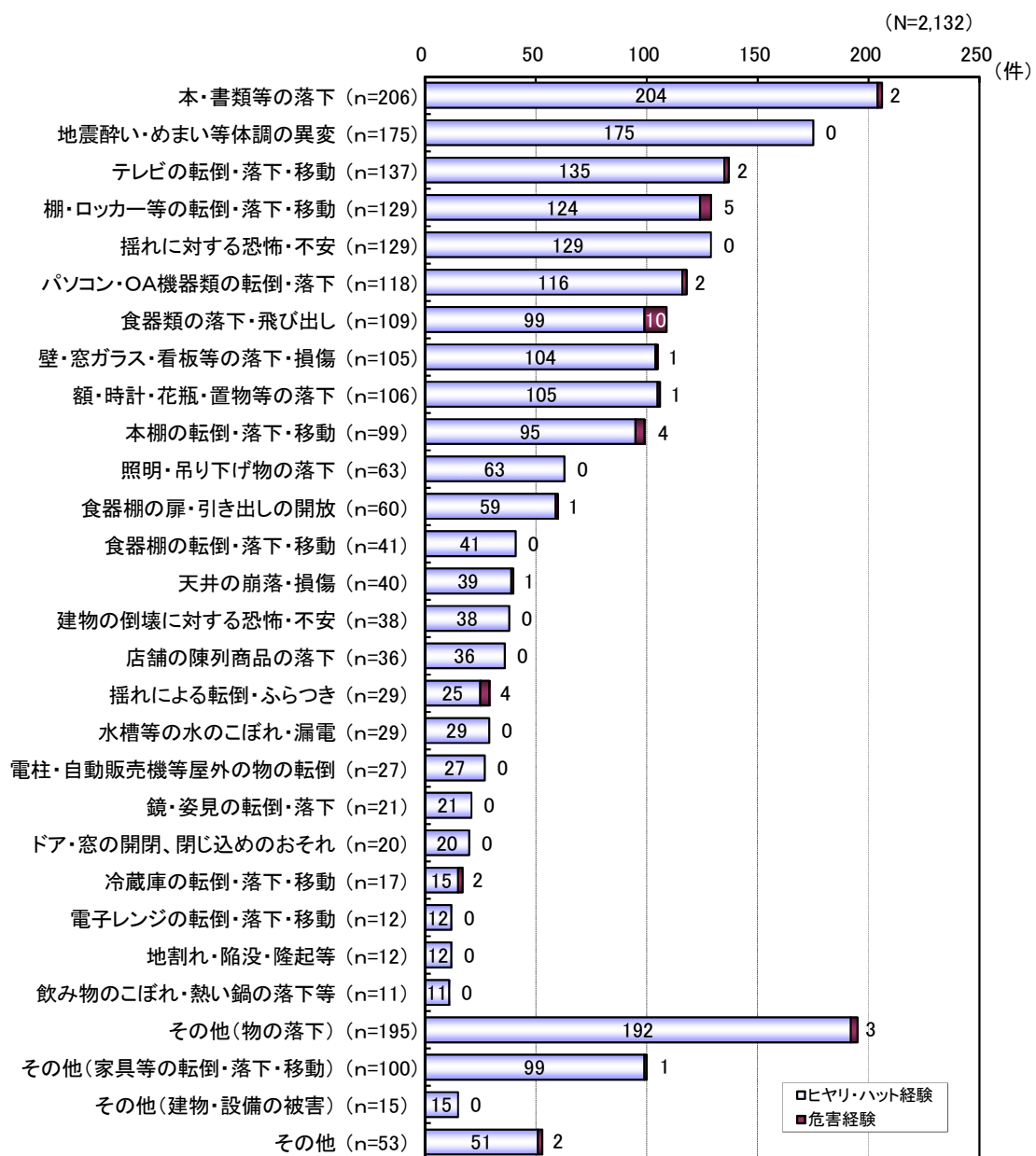
(6-2) 地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験時の状況

※回答者：地震が原因で「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があったと回答した2,132人

地震発生時のヒヤリ・ハット又は危害の経験について、その時の状況を自由記述式で聞いたところ、ヒヤリ・ハット事例（ケガはしなかった）が2,091件、危害事例（ケガをした）が41件であった。

最も多かった事例は、「本・書類等の落下」で206件、次いで「地震酔い・めまい等体調の異変」175件、「テレビの転倒・落下・移動」137件などとなっている。

地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験の状況（自由回答を分類）



ケガをした事例としては、『食器が落下して割れ、破片を踏んで足の裏に刺さった』など「食器類の落下・飛び出し」に関するものが最も多く、次いで、『対策をしていなかった腰高の棚を押さえたが、激しく揺れたので手首を打撲した』など、「棚・ロッカー等の転倒・落下・移動」に関する事例でケガが多かった。

地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験 主な事例

項目	内容	性別・年齢
本・書類等の落下	背の高い本棚の上部から重い本が多数落ちてきてヒヤリとした。	男性 50代
地震酔い・めまい等体調の異変	最初の揺れの後も緩やかな、ゆっくりした揺れが何度も、何度も繰り返したので船に乗ってるようで、むかむかしました。	男性 60代以上
テレビの転倒・落下・移動	51 インチのプラズマテレビが設置している固定された台を数十センチずれ、倒れてきそうになった。泣く子どもをテーブル下に入らせ、声をかけつつ、テレビが倒れないよう押さえ続けなければならなかった。	女性 40代
棚・ロッカー等の転倒・落下・移動	たんすが動いて部屋にはいれなくなった	男性 50代
	対策をしていなかった腰高の棚を押さえたが、激しく揺れたので手首を打撲し、1ヶ月以上残った。同じく腰高の棚が倒れ、置物がみんな割れた。	女性 40代
	洗面所の棚が落ち その落ちた棚が蛇口にあたり蛇口を押し お湯が流れっぱなしになっていた	女性 50代
パソコン・OA機器類の転倒・落下	高層階だったため長期振動だった。そのため、プリンターが部屋の中を行ったり来たりしていた。	男性 30代
	会社のパソコンがほとんど落下し、道を阻まれてしまったため、ヒヤリとした	女性 20代
食器類の落下・飛び出し	食器が落下して割れた破片を踏んで足の裏にささった。	女性 60代以上
壁・窓ガラス・看板等の落下・損傷	しばらくして外に出たら、ビルの窓ガラスが割れて落ちて来たためヒヤリとした。	女性 40代
	網戸が落ちて下に駐車していた車にぶつかった	女性 50代
本棚の転倒・落下・移動	職場内の本棚が倒れてきて、自分の肩にぶつかった。	男性 30代
食器棚の扉・引き出しの開放	観音開きの食器棚の扉が開き食器類を全部吐き出しつつ前に倒れた。	女性 40代
天井の崩落・損傷	会社のビルの壁や天井が崩れたので落下したコンクリートで軽症を負った	女性 30代
水槽等の水のこぼれ・漏電	水槽の水がこぼれて電気系統が漏電し停電した。	女性 50代
揺れによる転倒・ふらつき	大きな揺れに体が畳の上で転がされて、身を護る余裕すらなく、退避の移動のしようがなかった。	男性 60代以上
	揺れている最中に上司から逃げろといわれて急いで階段を下りていったら踏み外し足を捻った。	女性 20代
	外を歩いていたが、大きな揺れで周りの人たちの悲鳴がすごくてびっくりした。ビルからあわてて飛び出して来た人たちがぶつかってきて、転倒しそうになり、ヒヤリとした。	女性 30代
ドア・窓の開閉、閉じ込めのおそれ	地震後、外に出ようとしたら玄関の扉が開きにくくなっていて少し焦った	男性 30代
	マンションの11階から1階までを歩きながら、被害がないか点検をしていた時、ポーチの中に止めていた自転車が玄関のドアの前に倒れこんでいた。危険だと思ったが、他にも数件が同様だった。	男性 60代以上
飲み物のこぼれ・熱い鍋の落下等	IHのヒーターから沸騰した鍋が滑りおちた	女性 30代

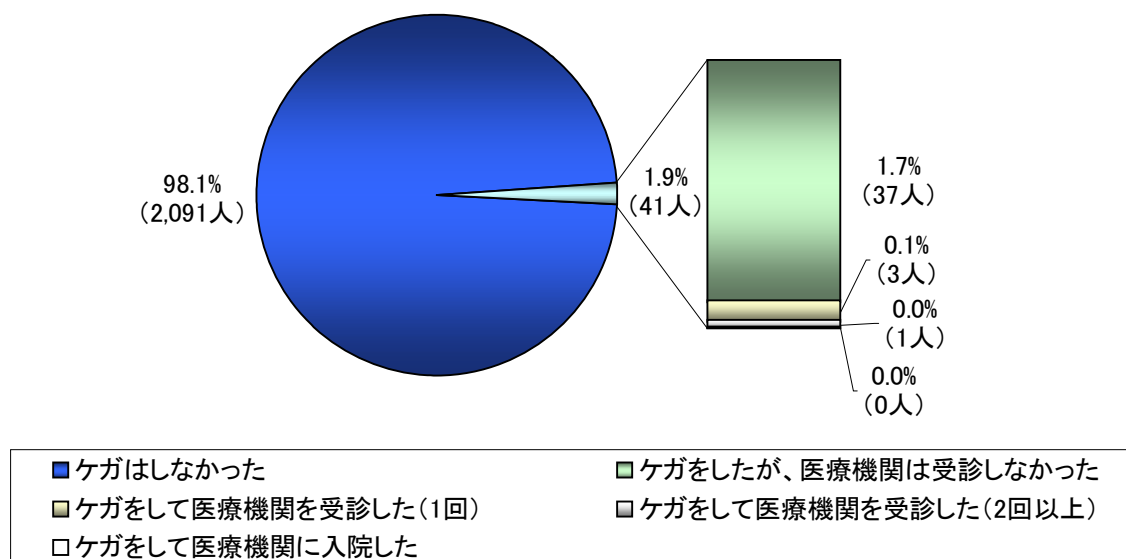
(7) 地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験の程度

※回答者：地震が原因で「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があったと回答した 2,132 人

地震発生時のヒヤリ・ハット又は危害の経験で、ケガをしたかどうかを聞いたところ、「ケガはしなかった」が 98.1%であった。ケガをした 41 人のうち、医療機関を受診した人は 4 人であった。

地震発生時のヒヤリ・ハット／危害経験の程度(単一回答)＜全体＞

(N=2,132)

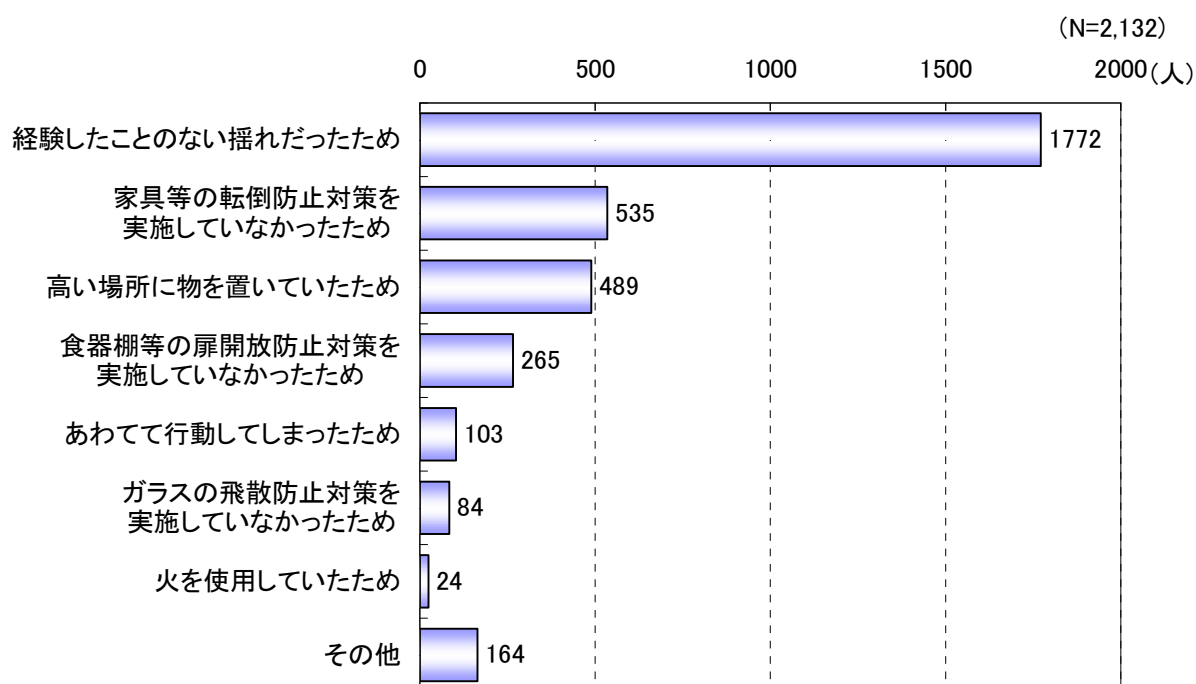


(8) ヒヤリ・ハット／危害経験に至った理由

※回答者：地震が原因で「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があったと回答した 2,132 人

ヒヤリ・ハットや危害を経験するに至った理由を聞いたところ、「経験したことのない揺れだったため」が最も多く 1,772 人（83.1%）であった。次いで「家具等の転倒防止対策を実施していなかったため」535 人（25.1%）、「高い場所に物を置いていたため」489 人（22.9%）が続いている。

ヒヤリ・ハット／危害経験に至った理由（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答（上位抜粋）

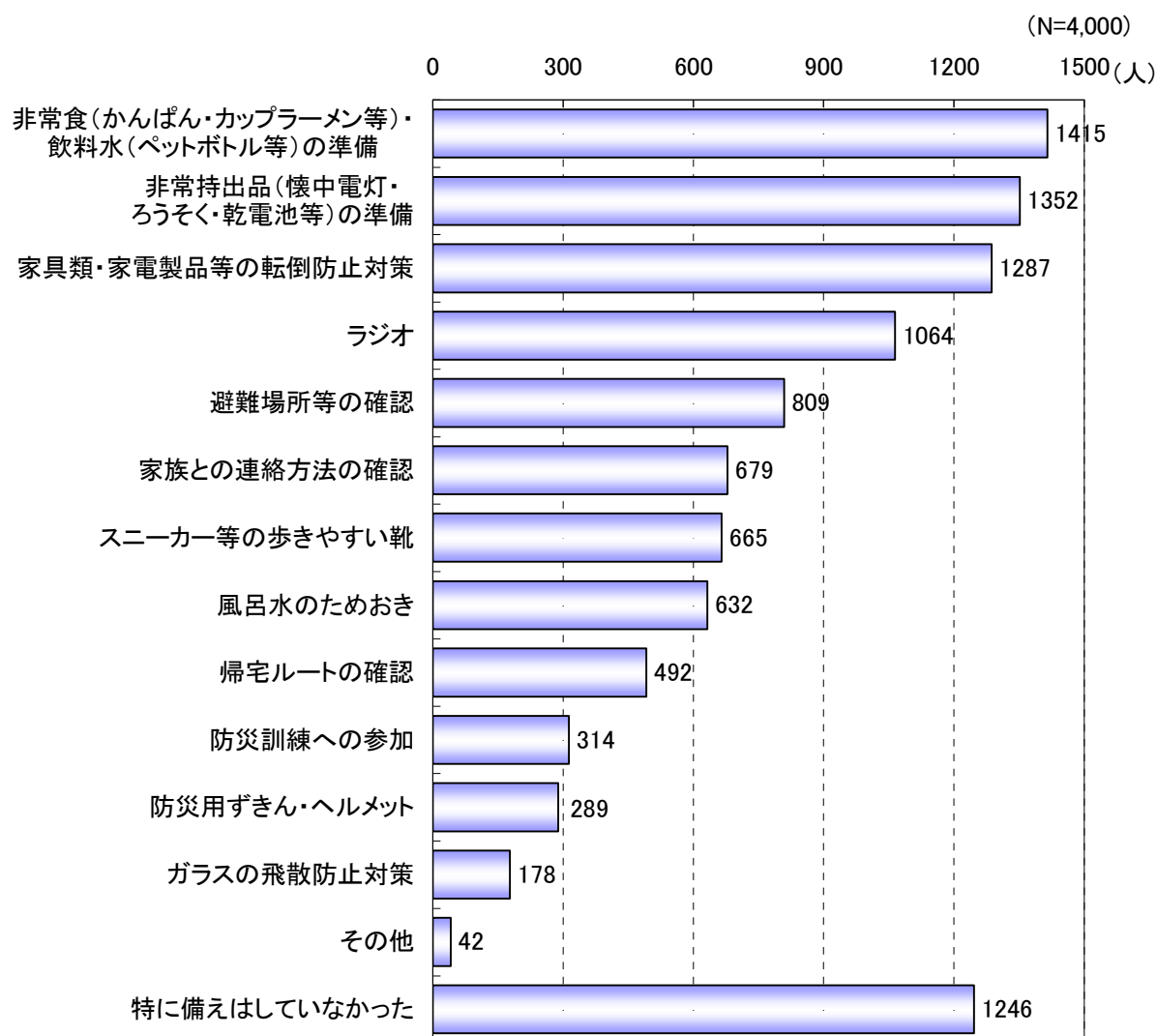
Q8.「その他」の回答	件数
家具の地震対策の不備	25
建造物の老朽化	18
想定外の災害だったため	10
地震に対する認識の甘さ	8
長く揺れていたため	7
地震に弱い構造	6
高層ビル内だったため	6
子供を守らなければならないから	4
不可抗力	3

(9) 大震災発生以前に実施していた地震への備え

※回答者：全員

東日本大震災の発生以前に実施していた地震への備えは、「非常食（かんぱん・カップラーメン等）・飲料水（ペットボトル等）の準備」が1,415人（35.4%）、「非常持出品（懐中電灯・ろうそく・乾電池等）の準備」が1,352人（33.8%）、「家具類・家電製品等の転倒防止対策」が1,287人（32.2%）となっており、同程度で上位に挙げられた。また、「特に備えはしていなかった」という回答は1,246人（31.2%）であることから、全体の7割は何らかの備えを実施していたことになる。

大震災発生以前に実施していた地震への備え（複数回答）＜全体＞

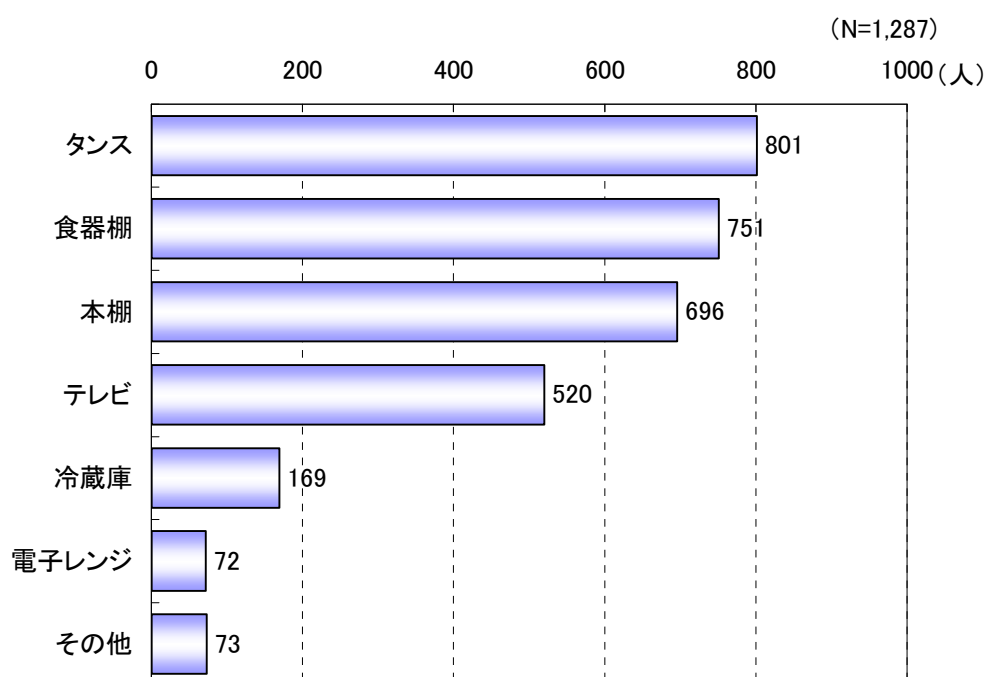


(10) 転倒防止対策を実施していた家具類・家電製品等

※回答者：家具類・家電製品等の転倒防止対策を実施していたと回答した 1,287 人

転倒防止対策を実施していたものは、「タンス」801 人（62.2%）、「食器棚」751 人（58.4%）、「本棚」696 人（54.1%）などとなっており、重量家具を挙げた人が多かった。電気製品の中では、「テレビ」が 520 人（40.4%）、「冷蔵庫」は 169 人（13.1%）であった。

転倒防止対策を実施していた家具類・家電製品等（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答（上位抜粋）

Q10.「その他」の回答	件数
パソコン	15
ラック	6
ピアノ	6
仏壇	5
靴箱	4
棚	4
作り付けの家具	3
オーディオ機器	2
タンス	2
プリンタ	2
鏡	2
机	2

(11) 使用していた転倒防止対策器具の種類・有効性

※回答者：家具類・家電製品等の転倒防止対策を実施していたと回答した1,287人

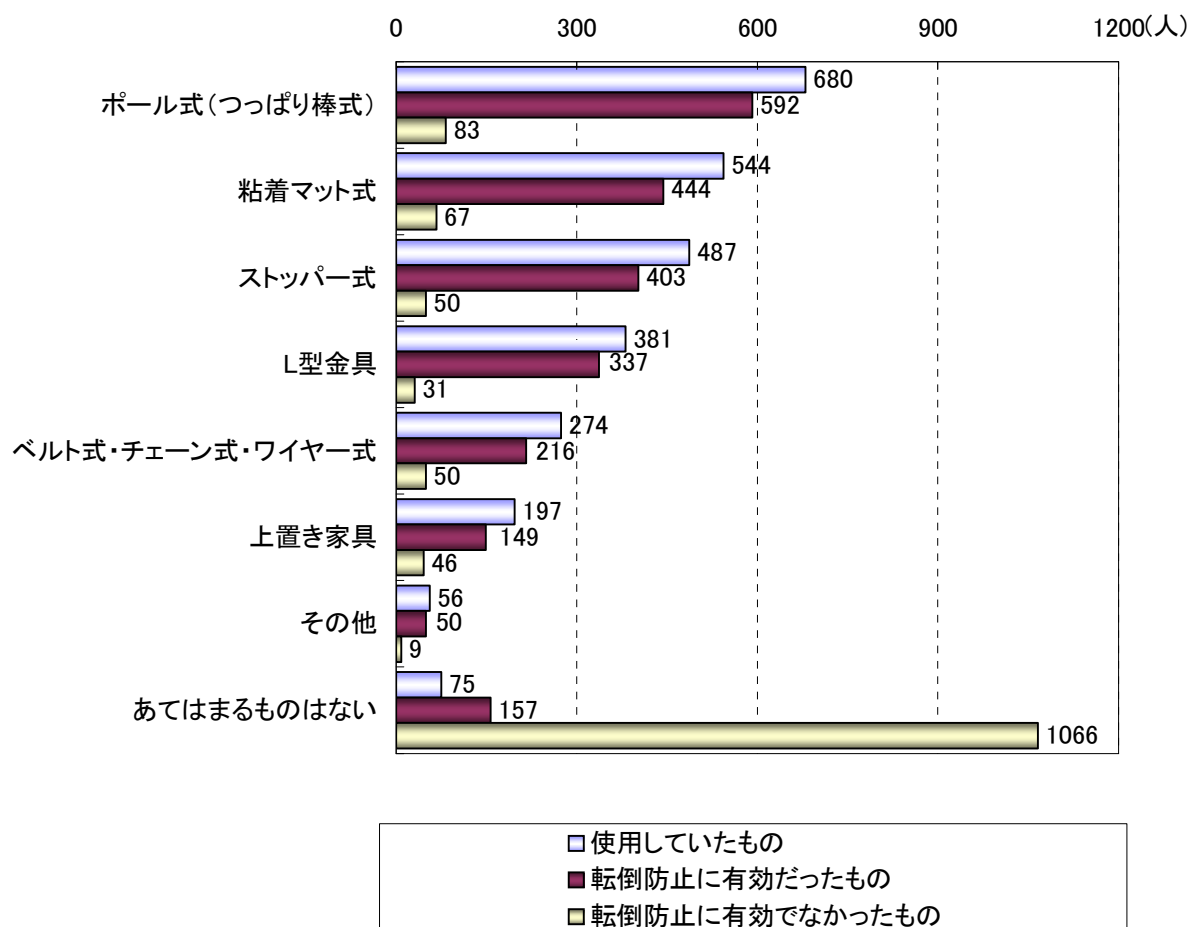
使用していた転倒防止対策器具の種類を聞いたところ、回答が最も多かったのは「ポール式（つっぱり棒式）」で680人（52.8%）、次いで「粘着マット式」544人（42.3%）、「ストッパー式」487人（37.8%）の順であった。

使用していた転倒防止対策器具について有効に機能したかを聞いたところ、「L型金具」は使用していた人の88.5%（337人）が有効であったと答えた。続いて、「ポール式（つっぱり棒式）」87.1%（592人）、「ストッパー式」82.7%（403人）、「粘着マット式」81.6%（444人）、「ベルト式・チェーン式・ワイヤー式」78.8%（216人）、「上置き家具」75.6%（149人）の順で使用人数に対する割合が高い。

一方、転倒防止に有効でなかったと回答した割合は、「L型金具」が使用人数の8.1%（31人）と低く、「上置き家具」は23.4%（46人）と高かった。

使用していた転倒防止対策器具の種類・有効性（複数回答）＜全体＞

(N=1,287)

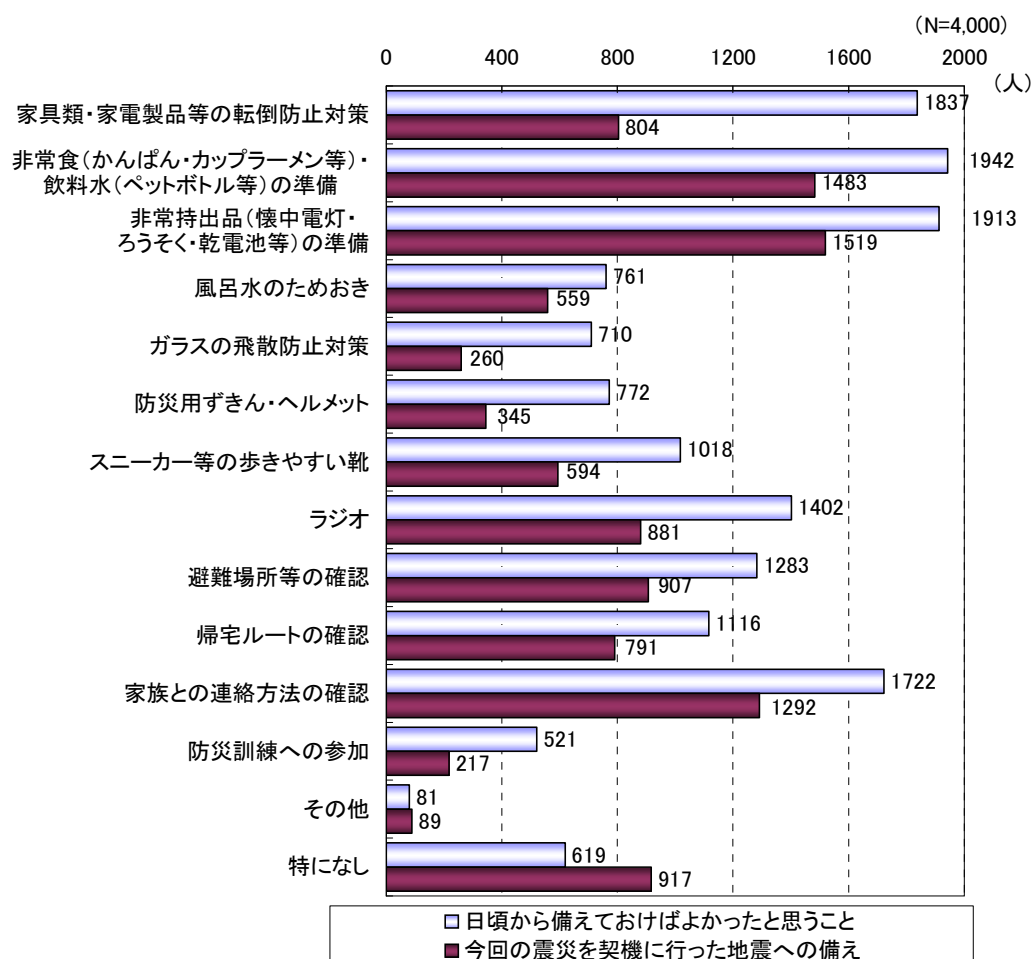


(12) 日頃から備えておけばよかったと思うこと・今回の震災を契機に行った地震への備え

※回答者：全員

今回の震災で、日頃から備えておけばよかったと思うことを聞いたところ、「非常食（かんぱん・カップラーメン等）・飲料水（ペットボトル等）の準備」1,942人（48.6%）と、「非常持出品（懐中電灯・ろうそく・乾電池等）の準備」1,913人（47.8%）がほぼ同程度で最も多く、この2つはセットで備えている人が多いといえる。次いで「家具類・家電製品等の転倒防止対策」1,837人（45.9%）、「家族との連絡方法の確認」1,722人（43.1%）が多かった。

日頃から備えておけばよかったと思うこと・今回の震災を契機に行った地震への備え（複数回答）＜全体＞



また、今回の震災を契機に行った地震への備えについては、上位2位は日頃から備えておけばよかったと思うことと同じく「非常持出品の準備」「非常食・飲料水の準備」であった。「家具類・家電製品等の転倒防止対策」は804人（全体の20.1%）と、日頃

から備えておけばよかったと思う割合（45.9％）に比べて低く、必要性を認識しつつも実際の対策は遅れていることがうかがえる。

「その他」の回答（上位抜粋）

Q12.「その他」の回答 （日頃から備えておけばよかったと思うこと）	件数
乾電池の買い置き	5
ペットの避難の準備	4
食器棚の扉のストッパー	4
水の確保	3
携帯電話の充電器を常備	2
携帯電話の充電	2
伝言ダイヤルの利用	2
懐中電灯	2
携帯用トイレ	2
いざという時の心構え	2
有事の際の連絡方法の検討	2
日頃からの片付け	2
ガソリンの補充	2

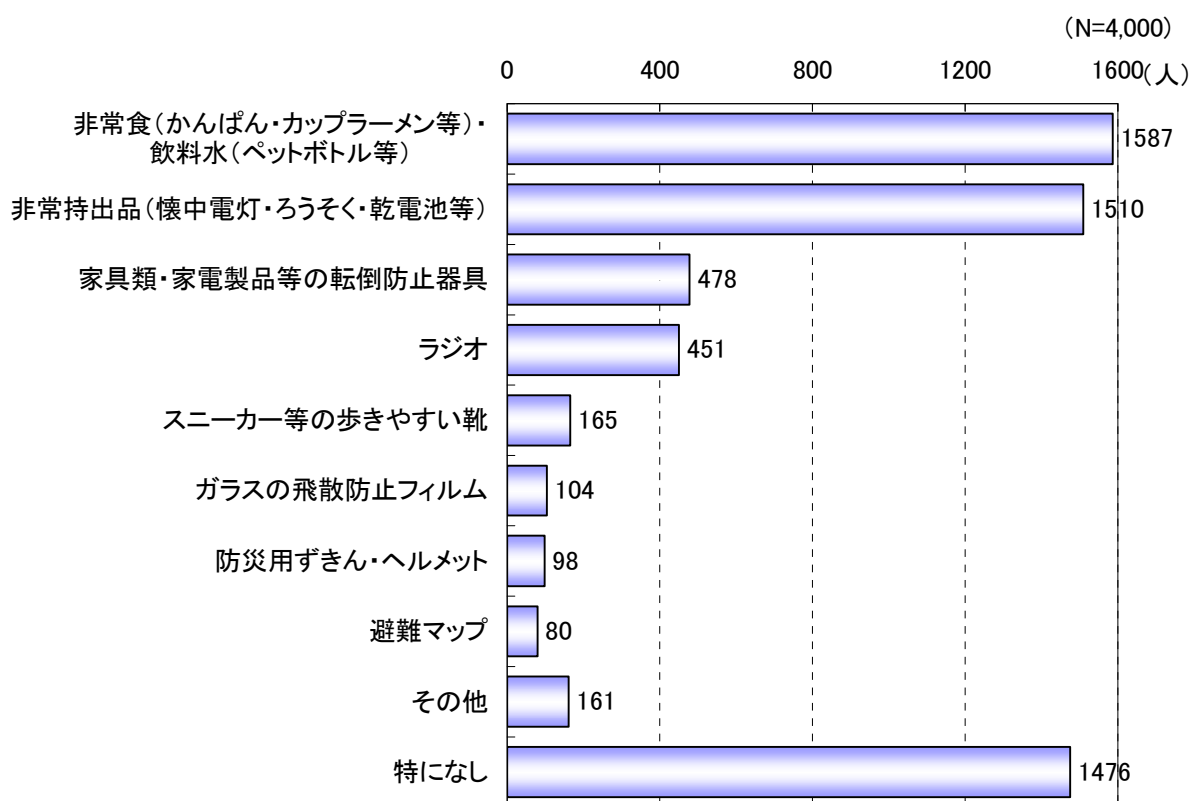
Q12.「その他」の回答 （今回の震災を契機に行った地震への備え）	件数
乾電池の買い置き	5
懐中電灯	4
食器棚の扉のストッパー	4
携帯電話の充電器を常備	3
ガソリンの補充	3
有事の際の連絡方法の検討	3
カセットボンベの常備	2
物の置き方	2
水の確保	2
携帯用トイレ	2

(13) 今回の震災を契機に購入した商品

※回答者：全員

今回の震災を契機に購入した商品を聞いたところ、「非常食（かんぱん・カップラーメン等）・飲料水（ペットボトル等）」が1,587人（39.7%）、「非常持出品（懐中電灯・ろうそく・乾電池等）」が1,510人（37.8%）となり、前項の「今回の震災を契機に行った地震への備え」とほぼ同様の結果となった。「家具類・家電製品等の転倒防止器具」は478人（12.0%）であった。

今回の震災を契機に購入した商品（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答（上位抜粋）

Q13.「その他」の回答	件数		
携帯電話の充電器	7	カセットコンロ	3
ランタン	6	リュックサック	3
乾電池	6	LEDランタン	3
食器棚の扉のストッパー	5	ポリタンク	3
懐中電灯	4	ランプ	3
簡易トイレ	4	ガスボンベ	3
電池	4	携帯電話	3
		エマージェンシーシート	3

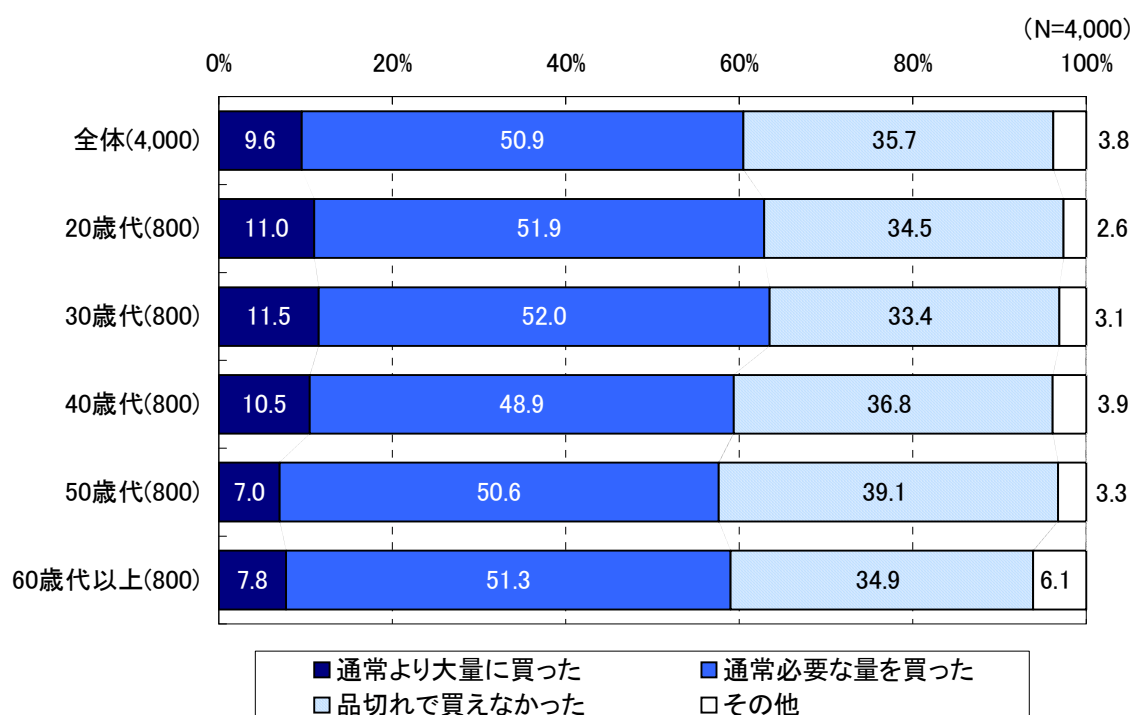
(14) 震災以降の物不足時の消費行動

※回答者：全員

今回の震災以降に物不足の状況があったが、どのような消費行動をとったかを聞いたところ、「通常必要な量を買った」という回答が50.9%を占めた。「品切れで買えなかった」は35.7%、「通常より大量に買った」は9.6%であった。

年代別にみると、50歳代以上では「通常より大量に買った」人の割合が、40歳代以下に比べてやや少なかった。

震災以降の物不足時の消費行動（単一回答）＜年代別＞



「その他」の回答（上位抜粋）

Q14.「その他」の回答	件数
買い置きでまかなった	37
特になし	28
消費を抑えた	17
いつも通り	16
必要な物だけを購入した	11
他地域の親戚・友人に必要な物を送ってもらった	9
落ち着くのを待った	3
少し多めに買った	3
買い占めをする人達を軽蔑した	2
水の確保	2
物資が不足している地域の親戚・友人に救援物資を送付した	2

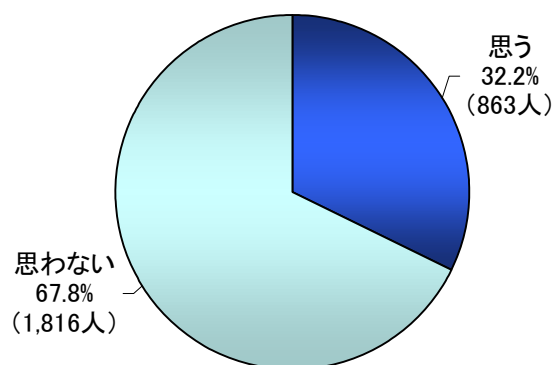
(15) 勤務先や学校などで実施している地震への備えが十分だと思うか

※回答者：勤務先や学校など日常通っている場所が「ある」と回答した 2,679 人

自分の勤務先や学校は、地震への備えが十分だと思うかを聞いたところ、「思わない」という回答は 67.8%、「思う」は 32.2%であった。

勤務先や学校などで実施している地震への備えが十分だと思うか(単一回答)<全体>

(N=2,679)

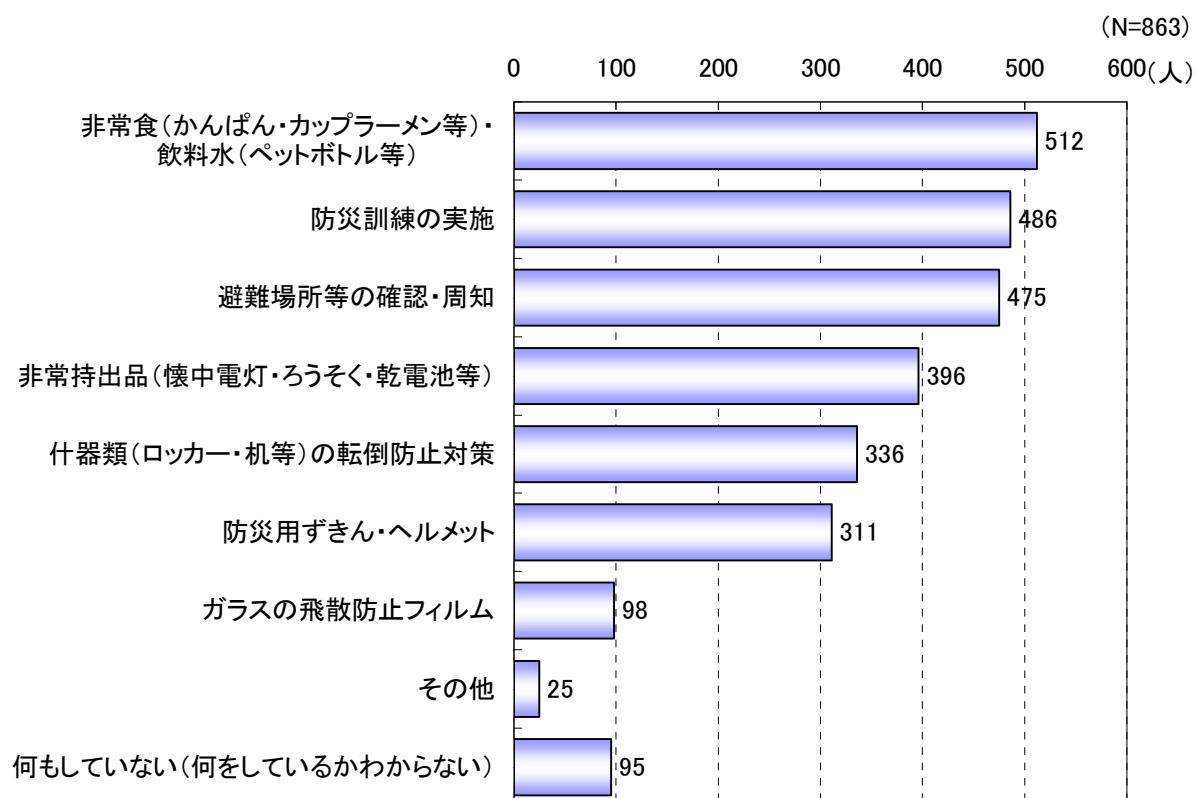


(16) 勤務先や学校などで実施している地震への備え

※回答者：自分の勤務場所や学校は、地震への備えが十分だと「思う」と回答した 863 人

自分の勤務先や学校が実施している地震への備えを聞いたところ、「非常食（かんぱん・カップラーメン等）・飲料水（ペットボトル等）」が 512 人（59.3%）で最も多く、「防災訓練の実施」486 人（56.3%）と「避難場所等の確認・周知」475 人（55.0%）がそれに続く。少なかったのは「ガラスの飛散防止フィルム」98 人（11.4%）であった。

勤務先や学校などで実施している地震への備え（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答（上位抜粋）

Q17.「その他」の回答	件数
建造物の耐震補強	3
免震構造ビル	3
緊急連絡網の整備	3
帰宅困難な場合の準備	2

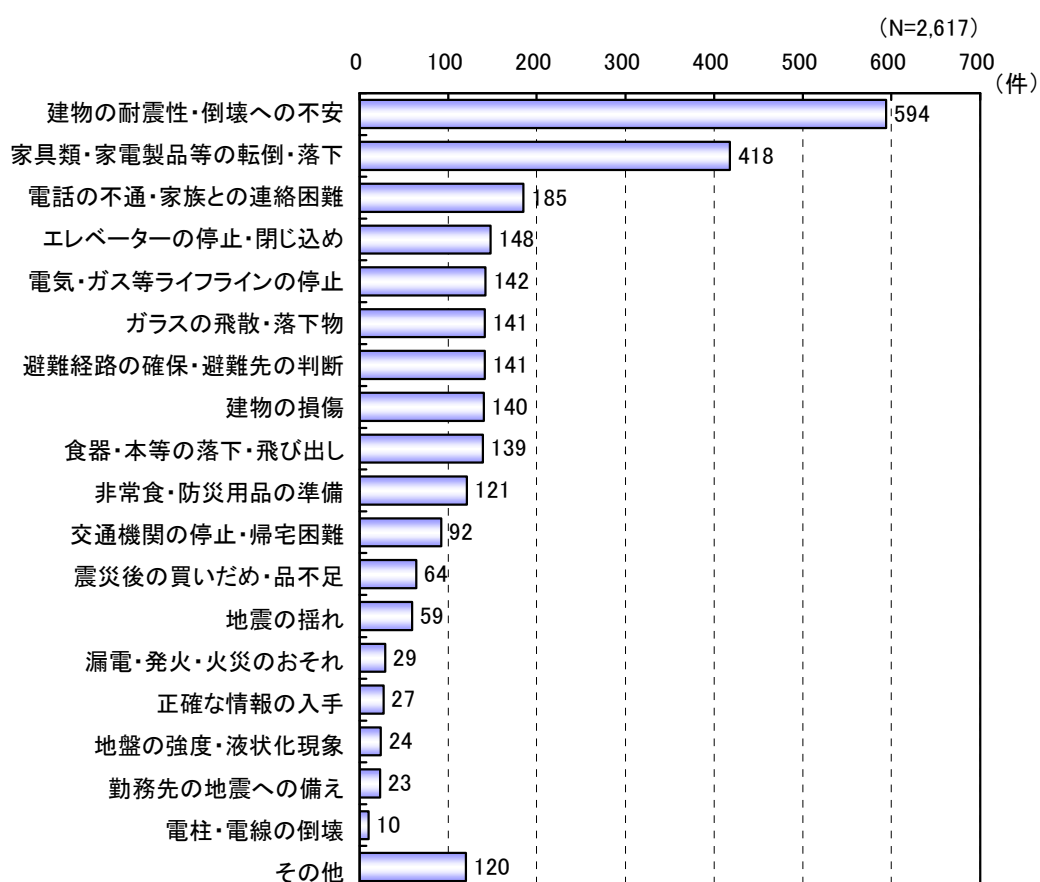
(17) 今回の震災で、建物・設備・使用していた製品等に関して危険性を感じたこと、不安に思っていること、困ったこと

※回答者：全員（任意回答）

今回の震災で、建物・設備・使用していた製品等に関して危険性を感じたこと、不安に思っていること等を自由記述式で聞いたところ、2,617 件の有効回答を得た。

内容を分類すると、「建物の耐震性・倒壊への不安」に関する回答が最も多く 594 件、続いて「家具類・家電製品等の転倒・落下」が 418 件であった。

今回の震災で危険性を感じたこと、不安に思っていること（自由回答を分類）



主な回答

項目	内容	性別・年齢
家具類・家電製品等の転倒・落下	ノートパソコン等それなりに重く日頃固定されていないものが今回のような震災で落下したりぶつかってくるのが怖いと思います。	男性 20代
	テレビが思いのほか倒れやすかった。小さいテレビは固定していないが、薄型になったことで、重心がさがり倒れやすくなったのではないと思った。	女性 40代
避難経路の確保・避難先の判断	非常階段のセキュリティーの解除がなされなかったこと	男性 30代

2 帰宅中のヒヤリ・ハット及び危害経験について

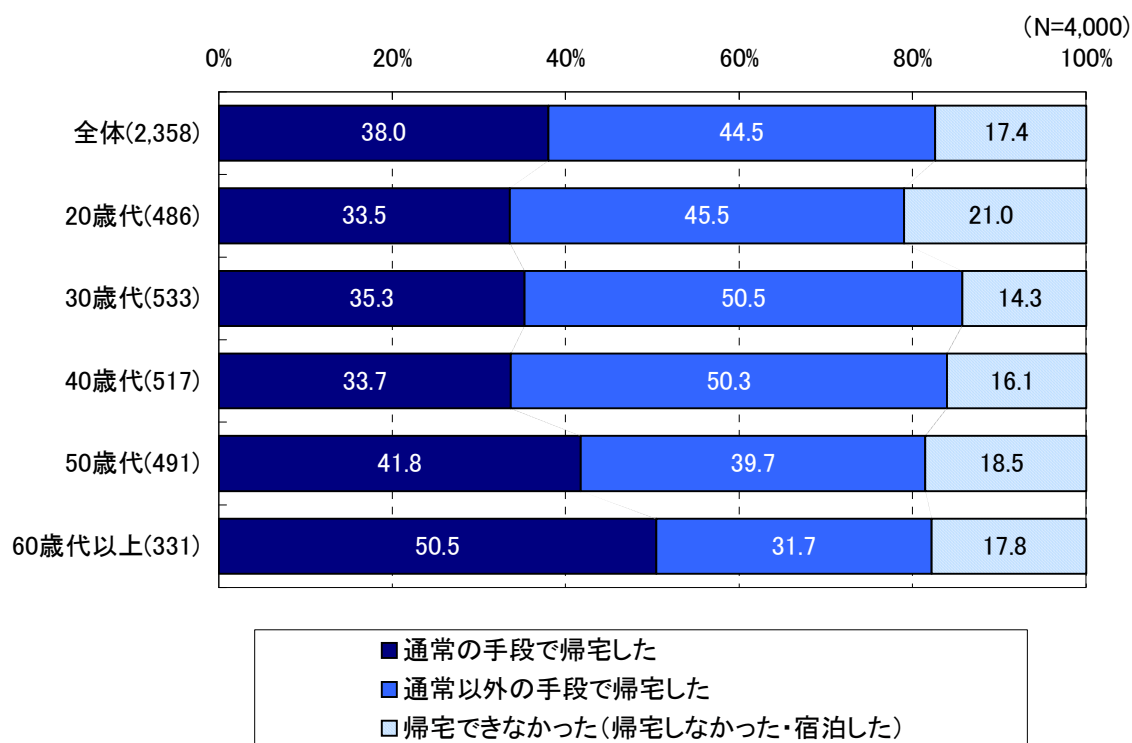
(1) 地震が発生した日の帰宅状況

※回答者：東日本大震災発生時に「自宅以外にいた」と回答した 2,358 人

地震が発生した日に自宅へ帰宅したかどうかを聞いたところ、全体では「通常以外の手段で帰宅した」が 44.5%で、「通常的手段で帰宅した」の 38.0%を上回った。「帰宅できなかった（帰宅しなかった・宿泊した）」という人は 17.4%であった。

年代別にみると、“30 歳代”“40 歳代”では、「通常以外の手段で帰宅した」が 5 割を占めており、50 歳代以上に比べて高かった。また、“20 歳代”では、「帰宅できなかった（帰宅しなかった・宿泊した）」と回答した割合が 21.0%で、他の年代と比べて高かった。

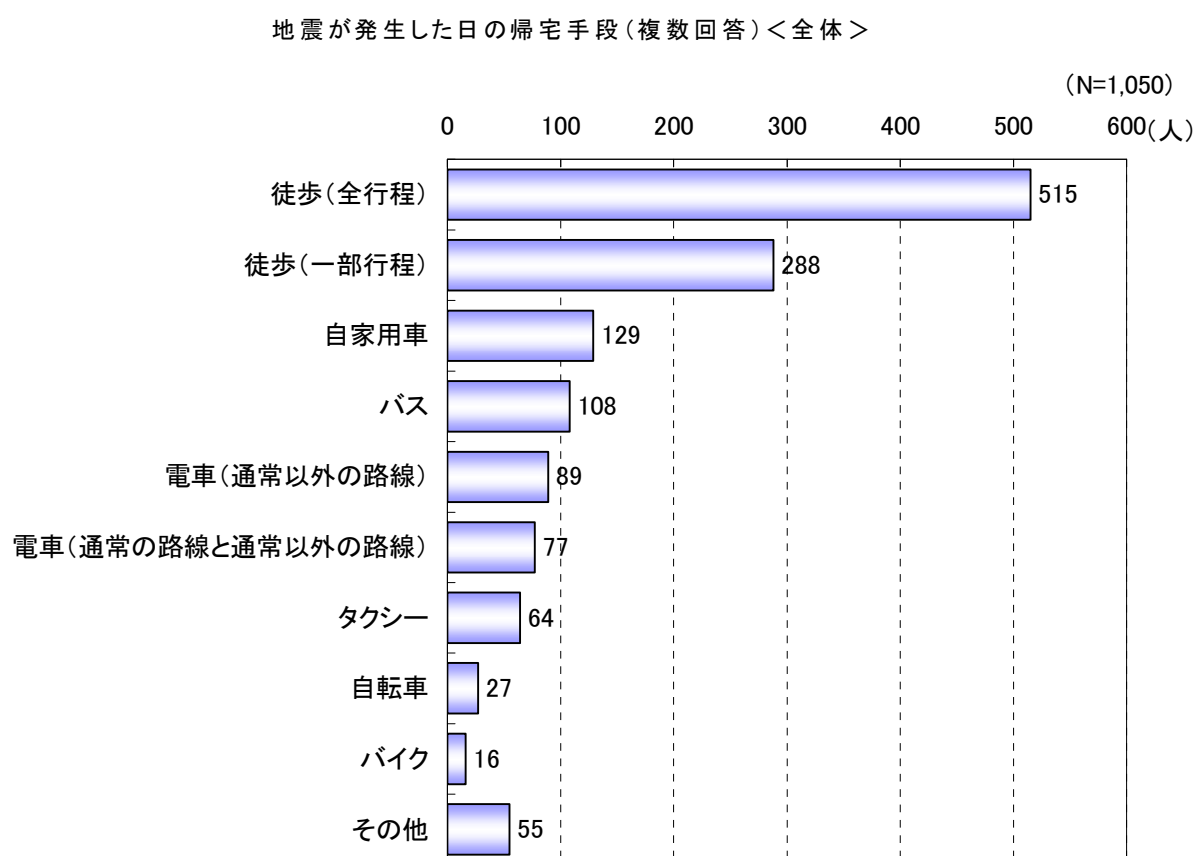
地震が発生した日の帰宅状況（単一回答）＜年代別＞



(2) 地震が発生した日の帰宅手段

※回答者：東日本大震災が発生した日に「通常以外の手段で帰宅した」と回答した 1,050 人

通常以外の手段で帰宅した人に、どのような手段で帰宅したかを聞いたところ、「徒歩(全行程)」が 515 人(49.0%)であった。次いで「徒歩(一部行程)」が 288 人(27.4%)となっており、多くの人が徒歩で帰宅していた。「自家用車」での帰宅は 129 人(12.3%)で、徒歩に次いで多かった。



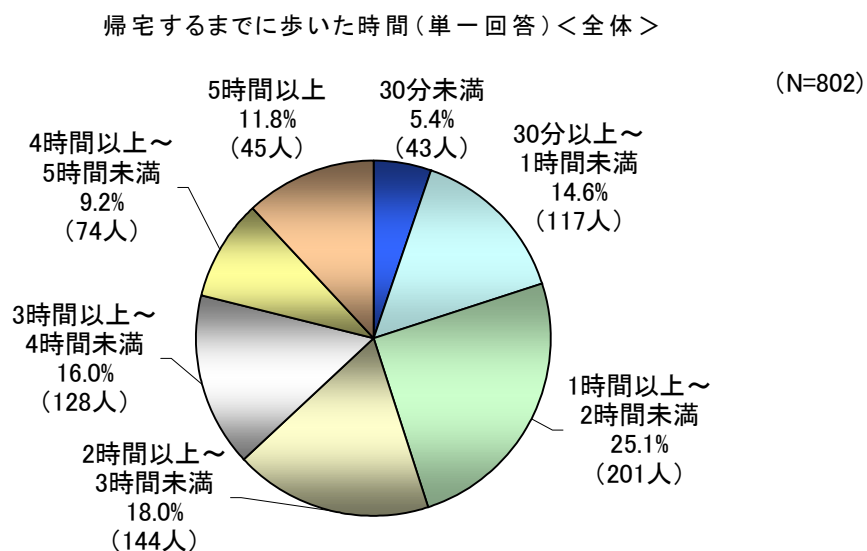
「その他」の回答(上位抜粋)

Q20.「その他」の回答	件数
社用車	21
同僚の車	5
家族に車で迎えに来てもらった	2
知人の車	2
都電	2
取引先の車で送っていただいた	2
友人の車	2
レンタカー	2

(3) 帰宅するまでに歩いた時間

※回答者：地震発生当日に「徒歩で帰宅した」と回答した 802 人

徒歩で帰宅した人に歩いた時間を聞いたところ、「1 時間以上～2 時間未満」が 25.1%で最も高く、次いで「2 時間以上～3 時間未満」が 18.0%、「3 時間以上～4 時間未満」が 16.0%となった。「5 時間以上」という回答も 11.8%あった。



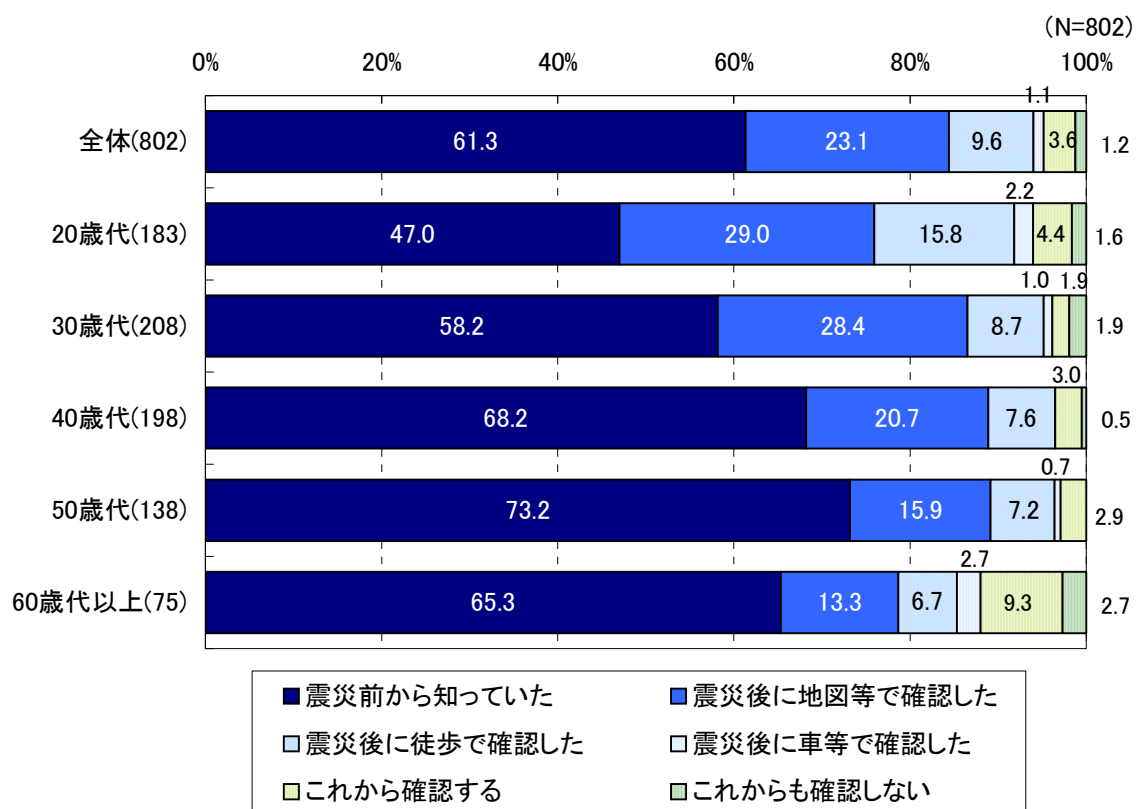
(4) 徒歩で帰宅する場合の経路の認知状況

※回答者：地震発生当日に「徒歩で帰宅した」と回答した 802 人

勤務先や学校等から徒歩で帰宅する場合の経路を知っていたかを聞いたところ、全体では「震災前から知っていた」が 61.3%を占めた。「震災後に地図等で確認した」は 23.1%、これに「震災後に徒歩で確認した」(9.6%)、「震災後に車等で確認した」(1.1%)を合わせた『震災後に何らかの方法で帰宅経路を確認した人』は 33.8%となる。

年代別にみると、50 歳代以下では、年代が低いほど「震災前から知っていた」割合が低かったが、『震災後に何らかの方法で帰宅経路を確認した人』の割合は“20 歳代”が最も高く 47.0%であった。

徒歩で帰宅する場合の経路の認知状況(単一回答)＜年代別＞

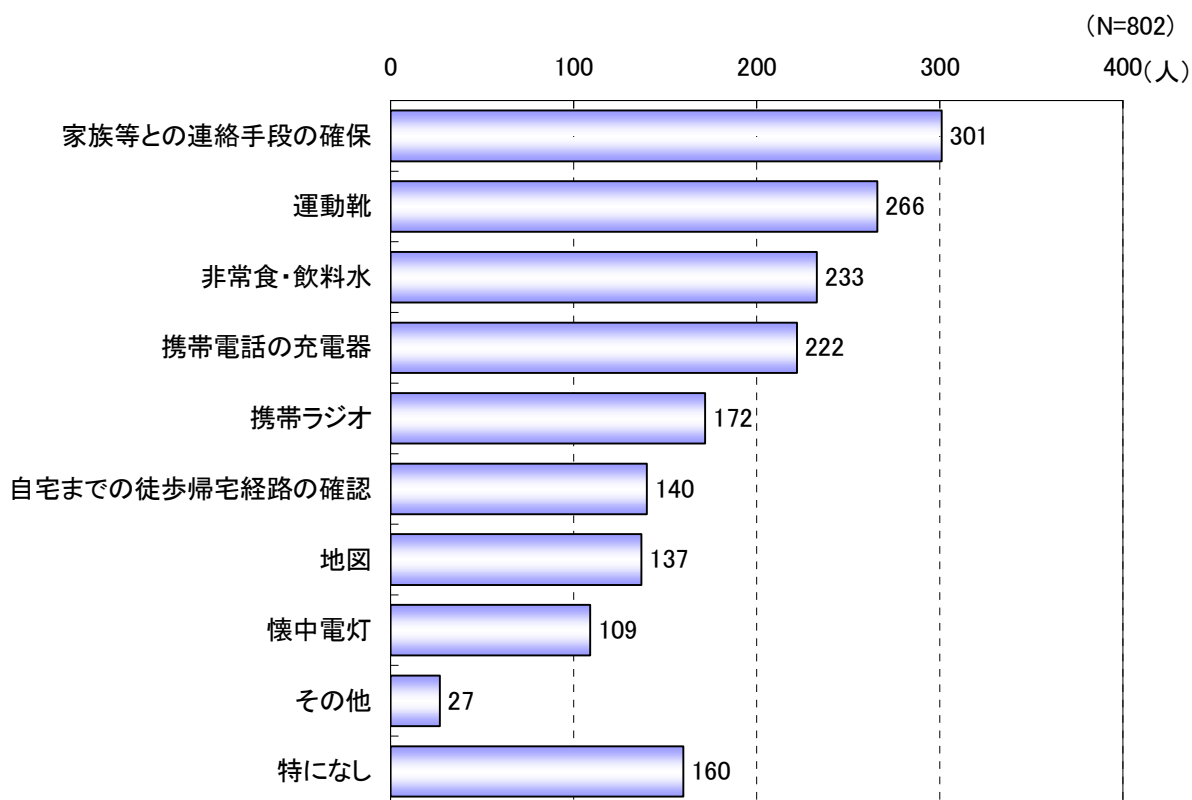


(5) 徒歩で帰宅中に、備えておけばよかったと思うもの

※回答者：地震発生当日に「徒歩で帰宅した」と回答した 802 人

徒歩で帰宅中に、備えておけばよかったと思うものを聞いたところ、「家族等との連絡手段の確保」が最も多く 301 人（37.5%）の人が挙げている。続いて「運動靴」266 人（33.2%）、「非常食・飲料水」233 人（29.1%）、「携帯電話の充電器」222 人（27.7%）などが上位となった。後述の「（9）ヒヤリ・ハット／危害経験の内容」の項で、「長時間の徒歩により疲労がたまった」が第 1 位となっていることから、徒歩帰宅にあたっては運動靴等の歩きやすい靴を備えておくことが重要と考えられる。

徒歩で帰宅中に、備えておけばよかったと思うこと（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答（上位抜粋）

Q23.「その他」の回答	件数
防寒具	6
自転車	3
食料	3
トイレ利用可能場所	2
ヘルメット	2

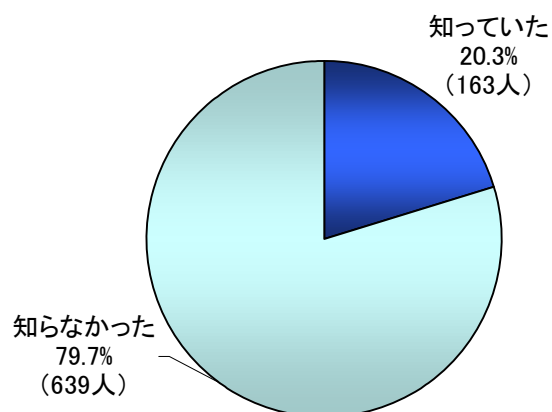
(6)「災害時帰宅支援ステーション」の認知状況

※回答者：地震発生当日に「徒歩で帰宅した」と回答した 802 人

帰宅困難者を支援するための「災害時帰宅支援ステーション」を知っていたかを聞いたところ、「知っていた」と答えた割合は徒歩で帰宅した人の 20.3%で、約 8 割は「知らなかった」と回答した。

「災害時帰宅支援ステーション」の認知状況(単一回答)<全体>

(N=802)



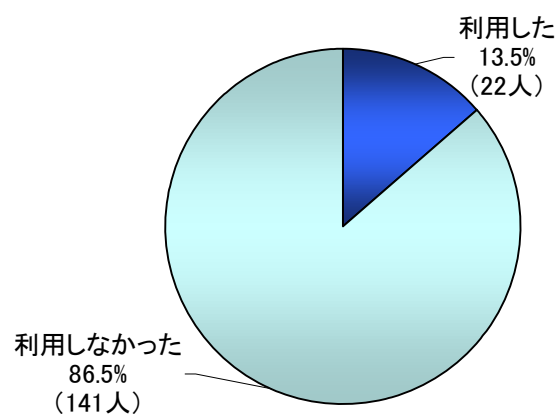
(7)「災害時帰宅支援ステーション」の利用状況

※回答者：災害時帰宅支援ステーションを「知っていた」と回答した 163 人

徒歩で帰宅中に「災害時帰宅支援ステーション」を利用したかを聞いたところ、災害時帰宅支援ステーションを「知っていた」人の 86.5%は「利用しなかった」と回答し、「利用した」は 13.5%にとどまった。

「災害時帰宅支援ステーション」の利用状況(単一回答)<全体>

(N=163)



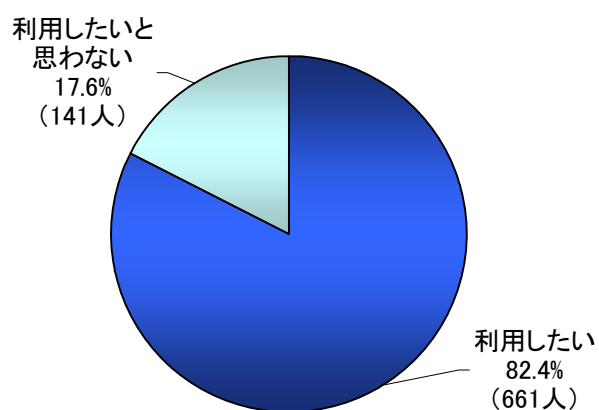
(8)「災害時帰宅支援ステーション」の利用意向

※回答者：地震発生当日に「徒歩で帰宅した」と回答した 802 人

今後、災害等で徒歩により帰宅しなければならない場合、「災害時帰宅支援ステーション」を利用したいかを聞いたところ、「利用したい」が 82.4%、「利用したいと思わない」は 17.6%であった。

「災害時帰宅支援ステーション」の利用意向(単一回答)<全体>

(N=802)

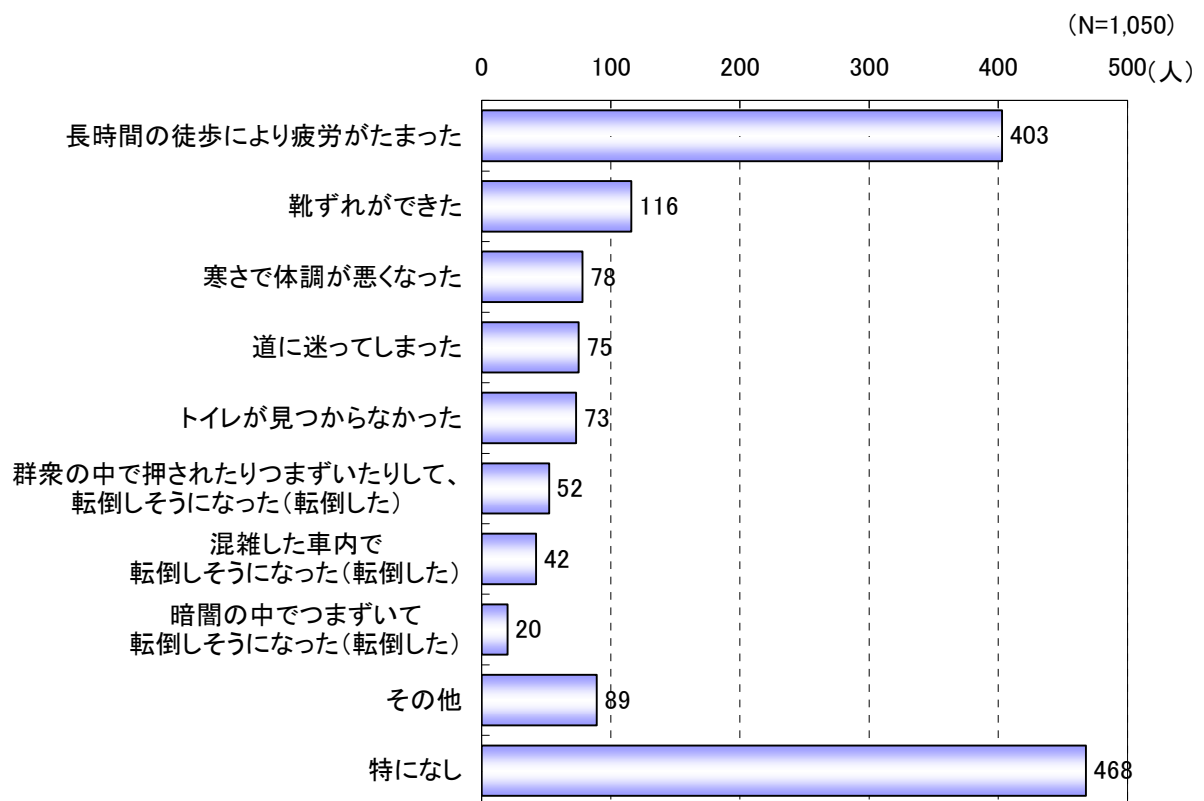


(9-1) 帰宅中のヒヤリ・ハット／危害経験の内容

※回答者：東日本大震災が発生した日に「通常以外の手段で帰宅した」と回答した 1,050 人

東日本大震災が発生した日に通常以外の手段で自宅まで帰宅する途中、「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があったかを聞いたところ、「特になし」という回答を除いた 582 人（55.4%）の人が何らかのヒヤリ・ハット経験をしていた。経験の内容は「長時間の徒歩により疲労がたまった」が 403 人（38.4%）で最も多く、2 位以下と大きな差があった。次いで「靴ずれができた」が 116 人（11.0%）で続いている。

通常以外の手段で帰宅中のヒヤリ・ハット／危害経験の内容（複数回答）＜全体＞



(9-2) 帰宅中のヒヤリ・ハット／危害経験時の状況

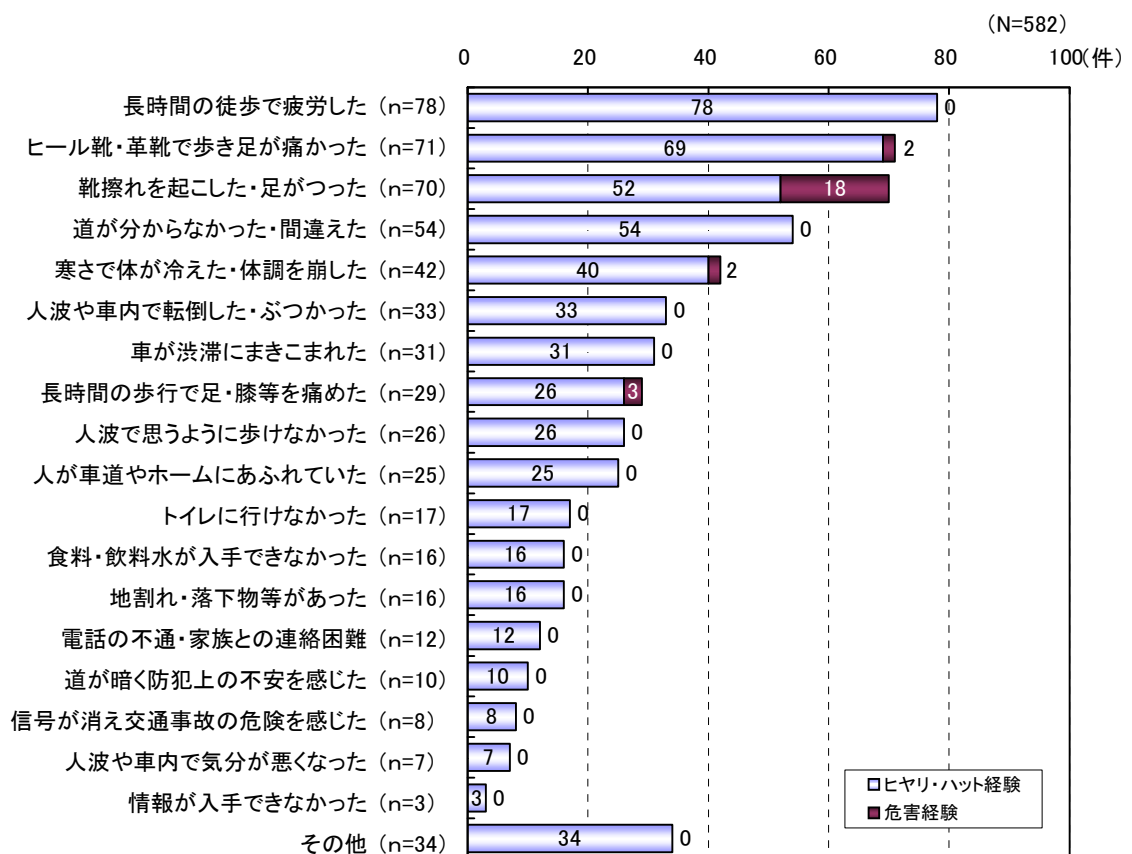
※回答者：帰宅中に「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があったと回答した 582 人

帰宅中のヒヤリ・ハット又は危害の経験について、その時の状況を自由記述式で聞いたところ、ヒヤリ・ハット事例（ケガはしなかった）が 557 件、危害事例（ケガをした）が 25 件であった。

最も多かった事例は、「長時間の徒歩で疲労した」で 78 件、次いで「ヒール靴・革靴で歩き足が痛かった」71 件、「靴擦れを起こした・足がつった」70 件などとなっている。

ケガをした事例としては、『普段長距離を歩かないので足の爪がはがれた』、『重い革靴で長時間歩いたために、数日後から坐骨神経痛になった』などがある。

帰宅中のヒヤリ・ハット／危害経験の状況（自由回答を分類）



帰宅中のヒヤリ・ハット／危害経験 主な事例

項目	内容	性別・年齢
長時間の徒歩で疲労した	仕事後の徒歩帰宅だったので疲れた	女性 20代
ヒール靴・革靴で歩き足が痛かった	重い革靴で長時間歩いたために、数日後から坐骨神経痛になった。	男性 40代
	ヒールだったため、足の筋や股関節などが痛くなり炎症をおこした。	女性 20代
	ハイヒールで長時間歩いたため、途中足がもつれて転びそうになった。	女性 40代
靴擦れを起こした・足がつった	普段長距離を歩かないので足の爪がはがれた。	男性 30代
	近道かと思ったら、遠回りだった。靴ずれをした。	男性 40代
	長時間歩いたため、足の血管が炎症を起こした。	女性 20代
	ヒールの高いブーツが壊れて、コンビニでサンダルを買った。靴擦れができた。	女性 30代
道が分からなかった・間違えた	徒歩用の最短ルートを知らなかったので電車路線沿いに帰った為遠くなった	男性 30代
	人の流れで歩いていたら道に迷ってしまった	男性 30代
	携帯の地図を頼りに帰宅したが道に迷った	男性 60代以上
寒さで体が冷えた・体調を崩した	震災後、職場の建物内に戻れず、着替えが出来ず、制服（薄着）でタクシーを長時間待っていたため、風邪を引いてしまった。	男性 40代
	寒くて、そのくせ、汗をかいたので、風邪をひきそうになった	女性 60代以上
人波や車内で転倒した・ぶつかった	暗くて泥に足をとられ転びそうになった。	男性 20代
	駅において、電車の再開がアナウンスされた途端に人が改札に押し寄せ、転倒しそうになった。	男性 20代
	歩いて帰宅中に、歩道橋を渡る際、混雑してつまってしまっているところを我先にと強引に進む人に押されて、倒れそうになった。	女性 20代
車が渋滞にまきこまれた	車を路上駐車して帰宅する人が多くてさらに渋滞になった。	男性 40代
	車で道路が大渋滞だったところに救急車などの緊急車両が来て道をあける時に、車と車の間隔が狭過ぎて思うように身動きが取れず、車同士ぶつかりそうになってヒヤリとした。	女性 30代
人が車道やホームにあふれていた	電車のホームが異常に人があふれ、身動きできず、どうしようもなかった。	男性 40代
	歩いて帰宅する人が多く、歩道のみならず、車道を歩く人が多くいて、危ないと思った。	男性 40代
地割れ・落下物等があった	歩いていて落下した窓ガラスの破片があちこち見られた。	男性 30代
	3度目の揺れで、ブロック塀の上の鉢植えが落ちてきた。	女性 50代
電話の不通・家族との連絡困難	歩いて帰る途中、携帯の電源が切れ、誰とも連絡がつかなくなり、ひやりとした。	男性 30代
道が暗く防犯上の不安を感じた	真夜中歩いていたので、周りに人がいなく、暴漢・強盗に襲われたら怖いと精神的に不安だった	男性 50代
信号が消え交通事故の危険を感じた	自家用車を運転中、停電のため消灯していた信号機に気がつかず、通常で交差点に進入してしまい他の車に衝突しそうになった。	男性 40代

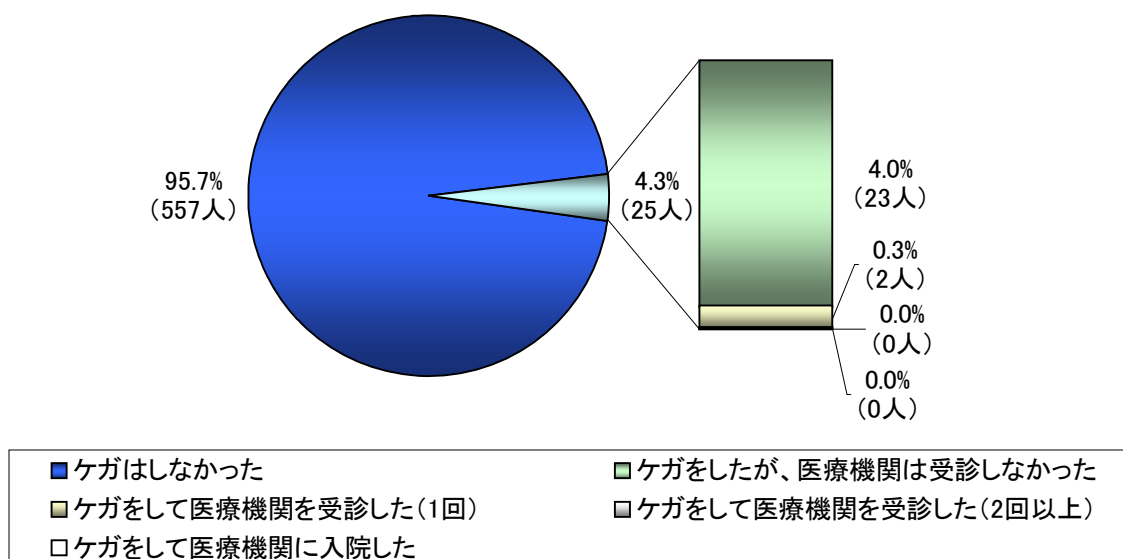
(10) 帰宅中のヒヤリ・ハット／危害の程度

※回答者：帰宅中に「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があったと回答した 582 人

帰宅中のヒヤリ・ハット又は危害の経験で、ケガをしたかどうかを聞いたところ、「ケガはしなかった」が 95.7%であった。ケガをした 25 人のうち、医療機関を受診した人は 2 人であった。

通常以外の手段で帰宅中のヒヤリ・ハット／危害の程度(単一回答)<全体>

(N=582)



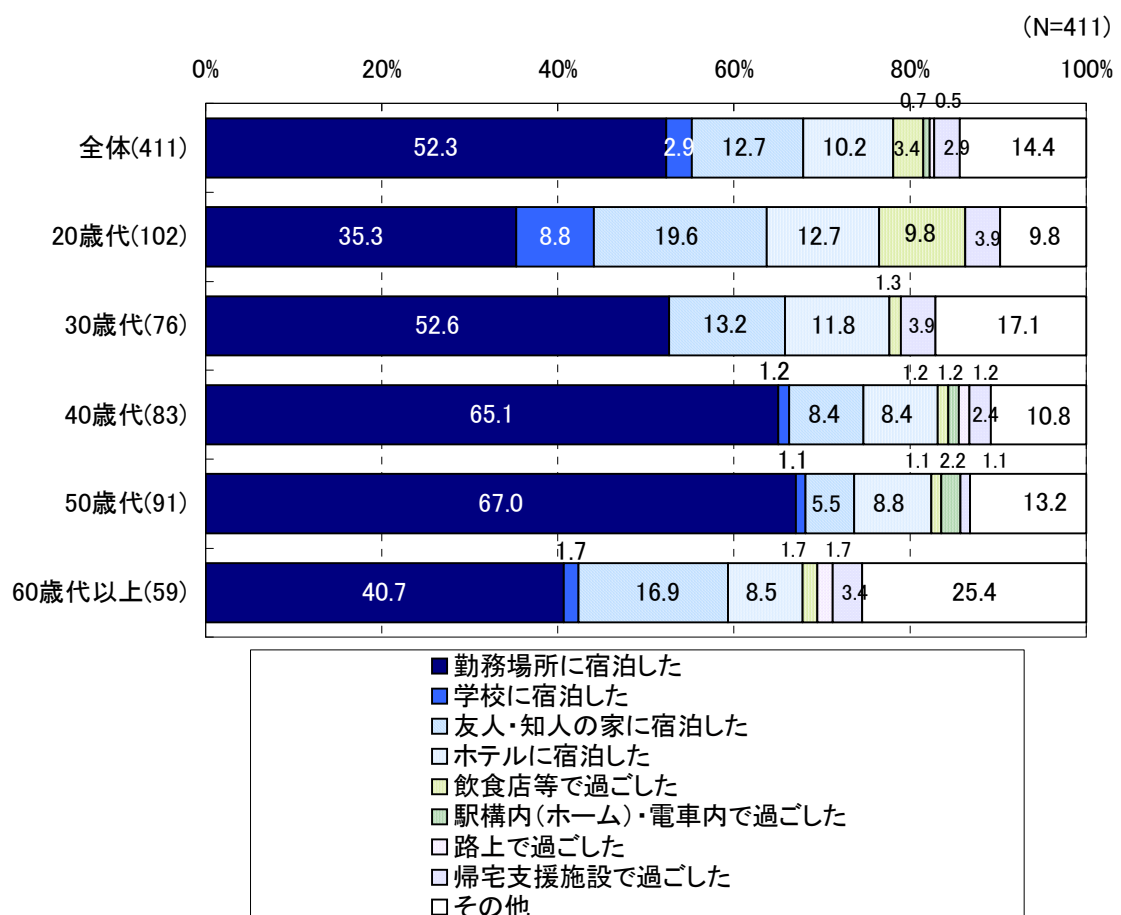
(11) 地震発生当日に宿泊又は過ごした場所

※回答者：東日本大震災が発生した日に「帰宅できなかった（帰宅しなかった・宿泊した）」と回答した 411 人

地震発生当日に帰宅できなかった（帰宅しなかった）人に、どこで宿泊又は過ごしたかを聞いたところ、全体では、「勤務場所に宿泊した」が 52.3%を占めた。次いで、「友人・知人の家に宿泊した」12.7%、「ホテルに宿泊した」10.2%と続いている。

年代別にみると、“40 歳代”“50 歳代”では「勤務場所に宿泊した」人が 6 割半ばと高い傾向にある。また、“20 歳代”では、「友人・知人の家に宿泊した」及び「飲食店等で過ごした」人の割合が他の年代と比べて高かった。

地震発生当日に宿泊又は過ごした場所（単一回答）＜年代別＞

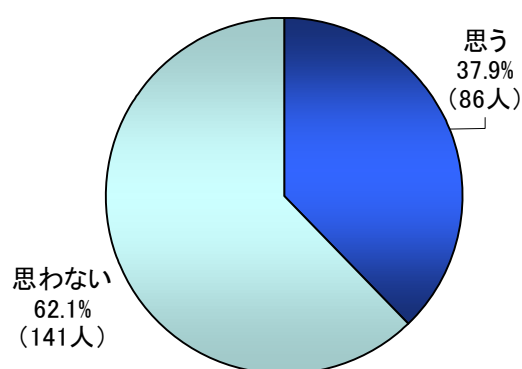


(12) 勤務先や学校の、帰宅困難者に対する支援体制は十分だと思うか

※回答者：地震が発生した日に「勤務場所・学校に宿泊した」と回答した 227 人

自分の勤務先や学校は、災害発生時における帰宅困難者に対する支援体制は十分だと思うかを聞いたところ、「思わない」が 62.1%で、「思う」（37.9%）という回答を上回った。

勤務先や学校の、帰宅困難者に対する支援体制は十分だと思うか(単一回答)<全体>
(N=227)

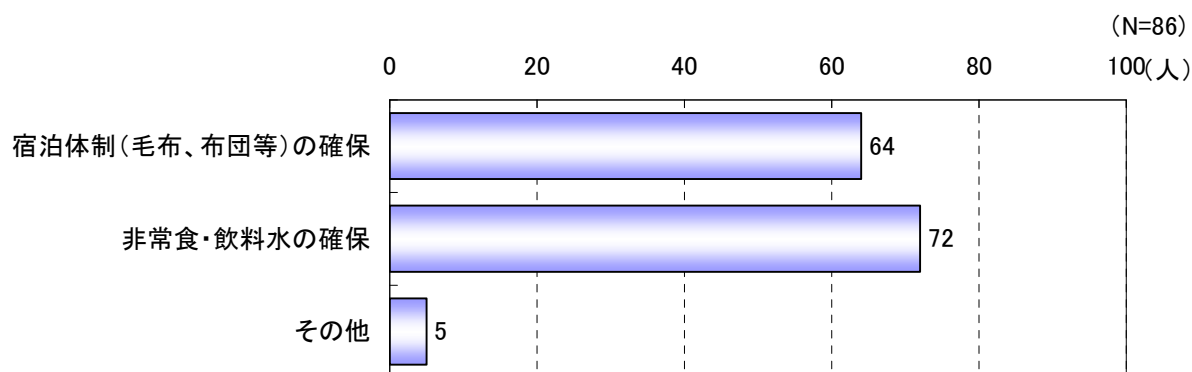


(13) 勤務先や学校で備えている、帰宅困難者に対する支援体制

※回答者：自分の勤務先や学校は、災害発生時における帰宅困難者に対する支援体制は十分だと「思う」と回答した 86 人

自分の勤務先や学校で備えている、帰宅困難者に対する支援体制を聞いたところ、「非常食・飲料水の確保」は 72 人（83.7%）、「宿泊体制（毛布、布団等）の確保」は 64 人（74.4%）であった。その他の支援体制としては、「タクシー代の支給」「非常灯、衛星電話」などの回答があった。

勤務先や学校で備えている、帰宅困難者に対する支援体制(複数回答)<全体>

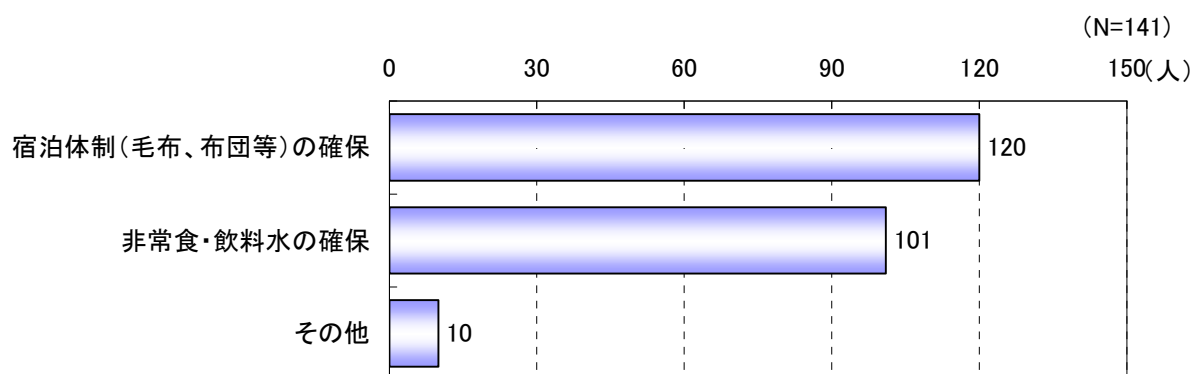


(14) 勤務先や学校などで不足している、帰宅困難者に対する支援体制

※回答者：自分の勤務先や学校は、災害発生時における帰宅困難者に対する支援体制は十分だと思わない」と回答した 141 人

自分の勤務先や学校では、帰宅困難者に対する支援体制として何が不足しているかを聞いたところ、「宿泊体制（毛布、布団等）の確保」が 120 人（85.1%）、「非常食・飲料水の確保」が 101 人（71.6%）であった。その他の回答として、「情報（提供）」、「（1 人の事務所のため）自分で対策を講じる必要がある」「社員の安全確保」などがあつた。

勤務先や学校で不足している、帰宅困難者に対する支援体制（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答

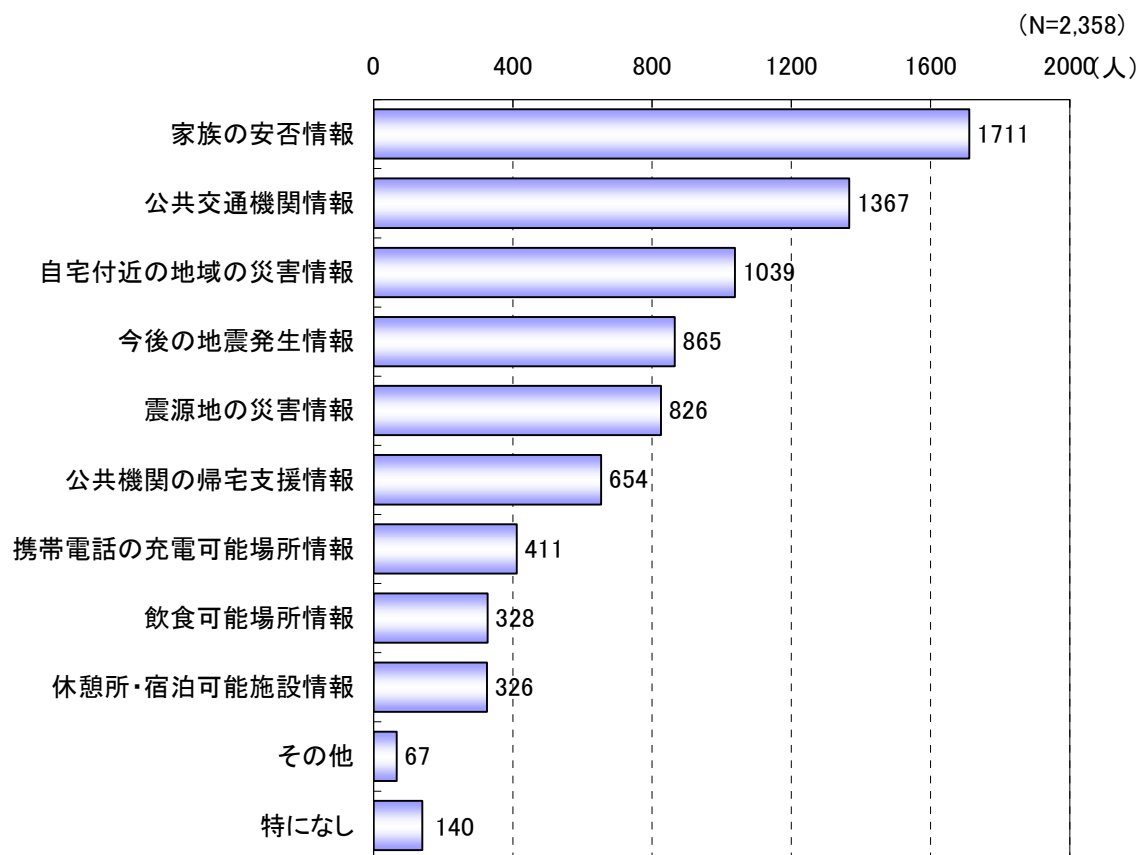
Q32.「その他」の回答	件数
情報	2
自分で対策を講じる必要がある	2
社員の安全の確保	1
業務終了時間まで拘束するなど、柔軟性に欠けている	1
災害時の判断基準	1
宿泊場所	1
複数回答	2

(15) 帰宅中又は宿泊中に知りたかった情報

※回答者：東日本大震災発生時に「自宅以外にいた」と回答した 2,358 人

東日本大震災が発生した日、自宅への帰宅中又は勤務場所等での宿泊中に知りたかった情報を聞いたところ、1,711 人（72.6%）の人が「家族の安否情報」を挙げた。次いで「公共交通機関情報」1,367 人（58.0%）、「自宅付近の地域の災害情報」1,039 人（44.1%）が続いている。

帰宅中又は宿泊中に知りたかった情報（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答（上位抜粋）

Q33.「その他」の回答	件数
自宅の状況	7
道路情報	4
友人の安否	4
ライフラインの状況	3
渋滞情報	3
震災の情報	3
携帯電話の電波状況、通信可能地域	2
停電情報	2
津波情報	2

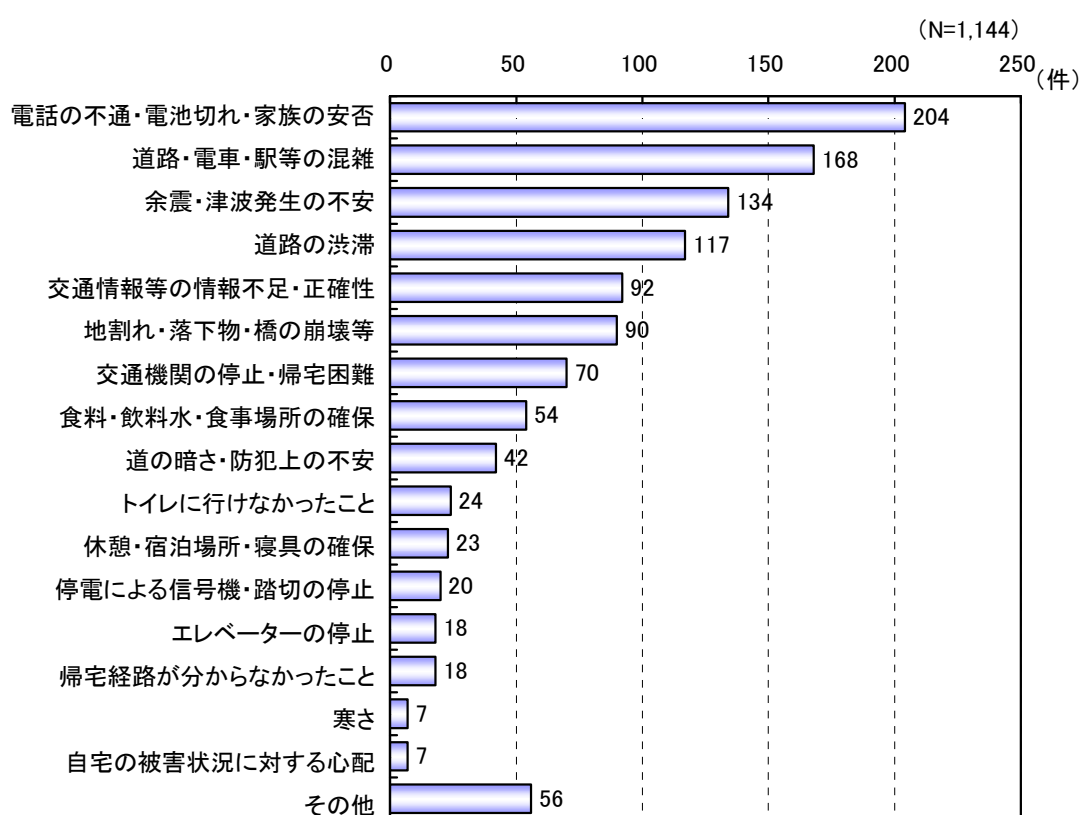
(16) 帰宅中又は勤務先等での宿泊中に危険性を感じたこと、困ったこと

※回答者：東日本大震災発生時に「自宅以外にいた」と回答した人（任意回答）

自宅への帰宅中又は勤務先等での宿泊中に危険性を感じたこと、困ったことを自由記述式で聞いたところ、1,144 件の有効回答を得た。

内容を分類すると、「電話の不通・電池切れ・家族の安否」に関する回答が最も多く 204 件、続いて「道路・電車・駅等の混雑」が 168 件、「余震・津波発生の不安」が 134 件などとなっている。

帰宅中又は勤務先等での宿泊中に危険性を感じたこと、困ったこと（自由回答を分類）



主な回答

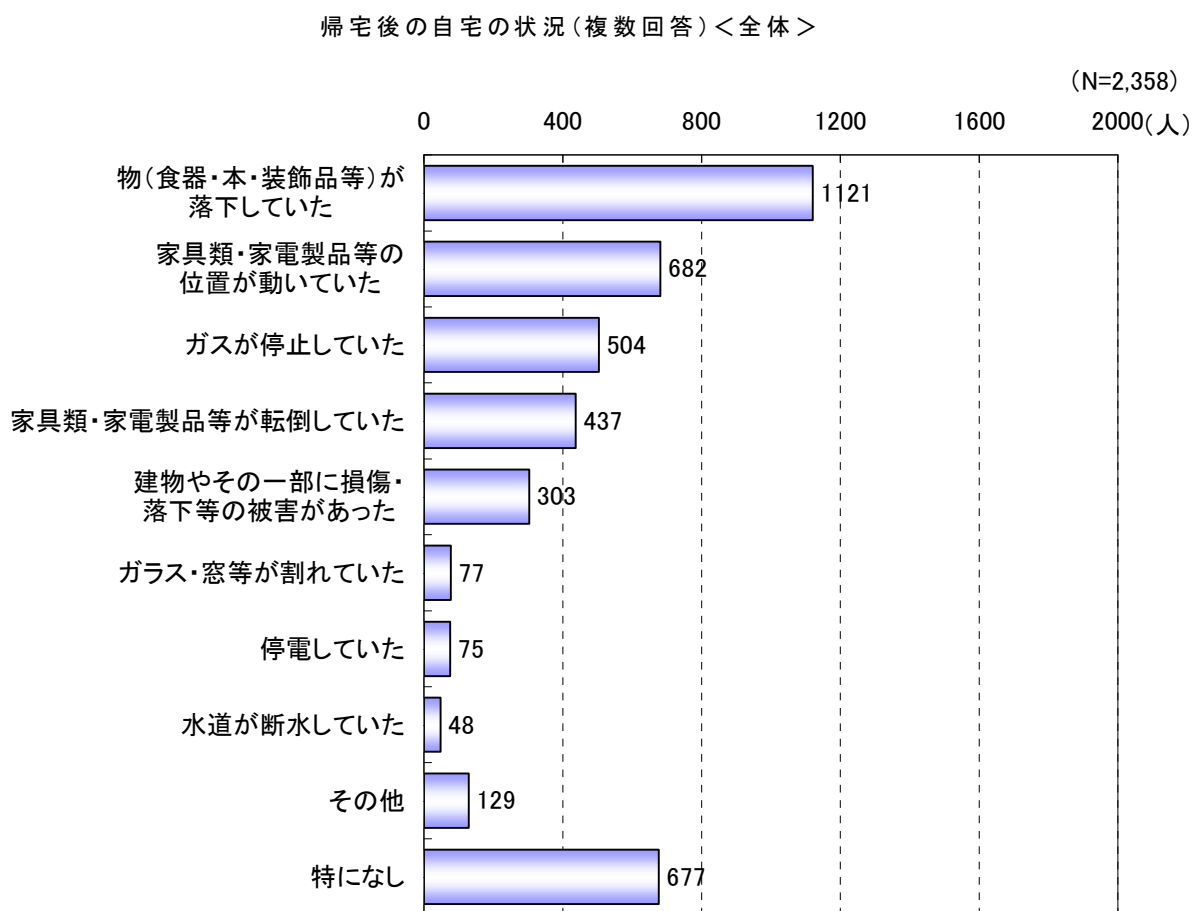
項目	内容	性別・年齢
道路・電車・駅等の混雑	人が歩道からあふれて車道を歩き始めたり、信号を無視して渡り始めたりして、帰宅することに必死なあまり無秩序になるのに危険性を感じた。	女性 30代
余震・津波発生の不安	帰宅途中の大きな余震が心配だった。特に橋を渡っているとき。	男性 50代
	余震が頻繁に起こったため、夜中じゅう会社のドアを開けっ放しにしていたので、安全面が気になり、寝られなかった。	女性 20代
交通情報等の情報不足・正確性	交通機関が動いているのか歩いていると情報が入ってこないののでさっぱり分からない	男性 30代

3 帰宅後のヒヤリ・ハット及び危害経験について

(1) 帰宅後の自宅の状況

※回答者：東日本大震災発生時に「自宅以外にいた」と回答した 2,358 人

東日本大震災が発生し、外出先から帰宅後に自宅の状況で何か変化があったかを聞いたところ、「物（食器・本・装飾品等）が落下していた」という回答が 1,121 人（47.5%）で最も多く、次いで「家具類・家電製品等の位置が動いていた」が 682 人（28.9%）、「ガスが停止していた」が 504 人（21.4%）と続いている。



「その他」の回答（上位抜粋）

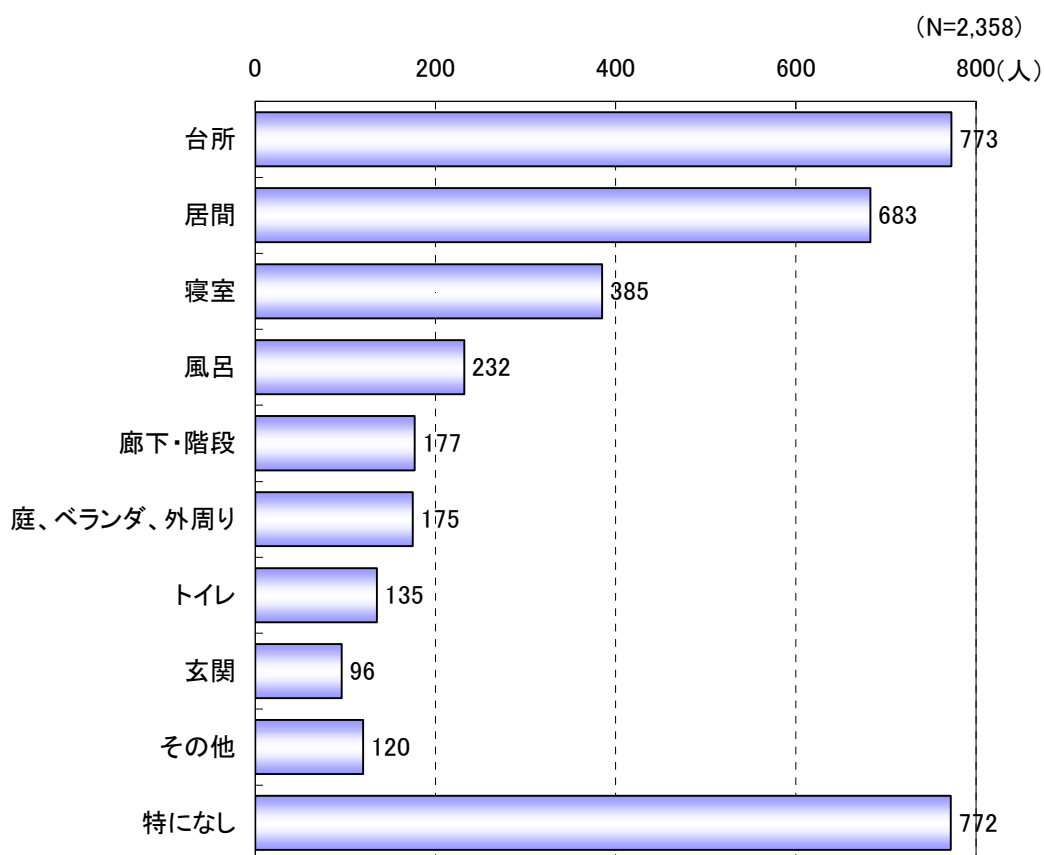
Q35.「その他」の回答	件数
エレベーターが停止していた	38
水槽の水がこぼれていた	11
食器等が割れた	9
ガスが止まっていた	7
窓が開いていた	5
ペットが怯えていた	3
漏水があった	3

(2) 在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所

※回答者：東日本大震災発生時に「自宅以外にいた」と回答した 2,358 人

外出先から帰宅後、家族等からの話も含めて、もし在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所を聞いたところ、「台所」が 773 人（32.8%）で最も多く、「居間」683 人（29.0%）、「寝室」385 人（16.3%）と続く。「特になし」と回答した人は 772 人（32.7%）であった。

在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答（上位抜粋）

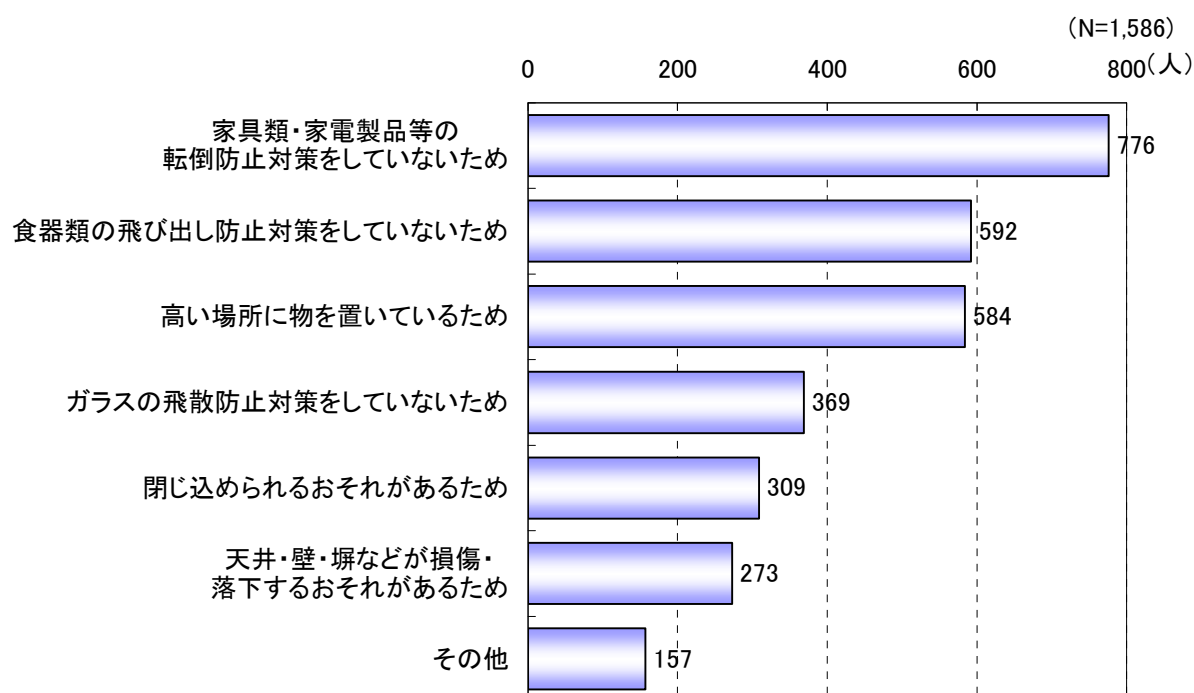
Q36.「その他」の回答	件数
エレベーター	19
書斎	15
すべて	10
本棚がある部屋	6
子供部屋	5
家全体	4
自分の部屋	4
物置	3
建物全体	3
納戸	3

(3) 在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた理由

※回答者：在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所を回答した 1,586 人

在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた理由については、「家具類・家電製品等の転倒防止対策をしていないため」が最も多く、776 人（48.9%）であった。続いて、「食器類の飛び出し防止対策をしていないため」592 人（37.3%）、「高い場所に物を置いているため」584 人（36.8%）が同程度の人数となっている。

在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた理由（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答（上位抜粋）

Q37.「その他」の回答	件数
衣類を着ていないため	22
火事の危険性があるため	16
本が落下する危険性があるため	11
すぐに行動できないため	6
転倒防止策だけでは耐えられない家具があるから	5
階段から滑り落ちる危険性があるため	4
落下してケガをする恐れがあるため	3
老朽化しているため	3
エレベーターの状態が把握できないから	3
書籍が大量にあるため	3
落下物の危険性があるため	3

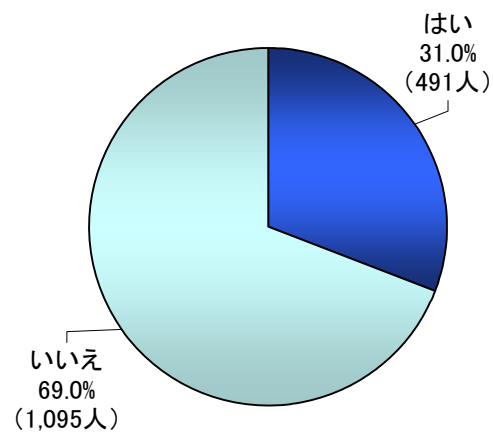
(4) 在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所の対策状況

※回答者：在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所を回答した 1,586 人

在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所について、すでに対策をとったか聞いたところ、「いいえ」という回答が 69.0%で、「はい」は 31.0%であった。危険性を認識しつつも、7割近くの人は対策をとっていないことが分かった。

在宅中に大地震が発生したら危険だと感じた場所の対策状況(単一回答)<全体>

(N=1,586)

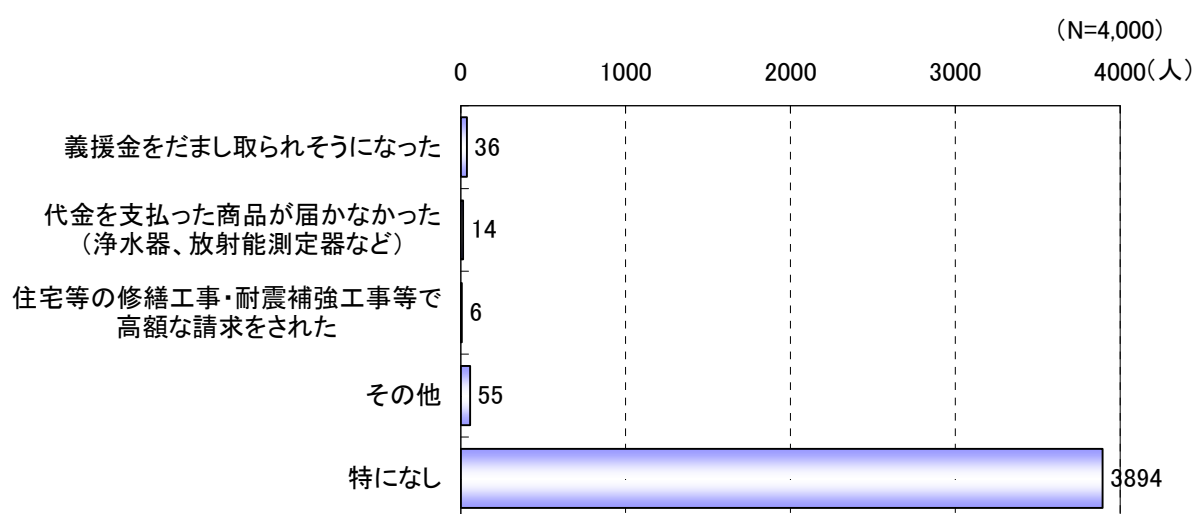


(5) 震災に便乗した悪徳商法や勧誘等の被害経験

※回答者：全員

東日本大震災以降に、震災に便乗した悪徳商法や勧誘等の被害にあいそうになった経験があるかを聞いたところ、「特になし」という回答が3,894人(97.4%)であった。何らかの被害経験があった人は106人で、「義援金をだまし取られそうになった」が36人、「代金を支払った商品が届かなかった(浄水器、放射能測定器など)」が14人、その他の回答として「明らかに怪しい募金活動」に関するものが13件あった。

震災に便乗した悪徳商法や勧誘等の被害経験(複数回答)<全体>



「その他」の回答(上位抜粋)

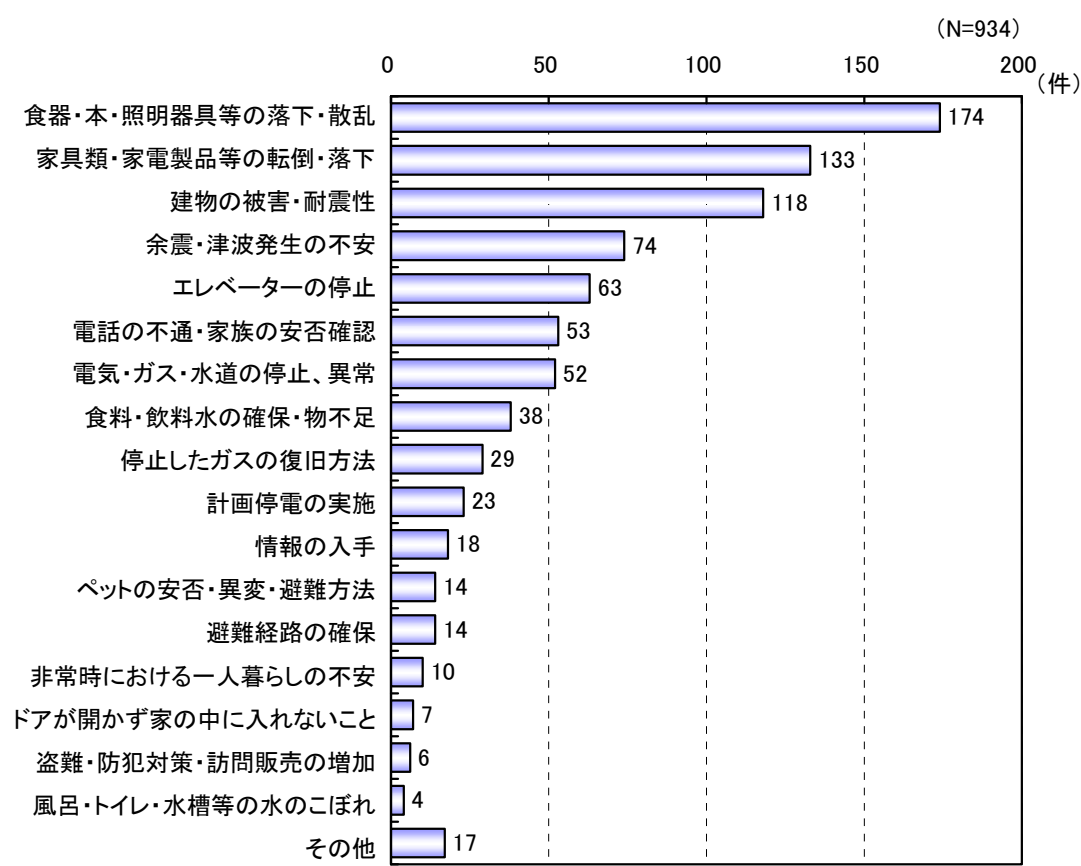
Q39.「その他」の回答	件数
明らかに怪しい募金活動	13
被災地の作物や水の購入をすすめられた	4
買占めのせいで、物価が高騰した	3
自称貴金属買取業者が訪れるようになった	2
リフォームなどの電話	2
チェーンメール	2
福島から来てお金がないと声をかけられた	2
扇風機を購入したが、すぐ壊れてしまった	2
ソーラー発電機の購入をすすめる電話	2
水を売りに来た	2

（６）外出先から帰宅後に自宅について危険性を感じたこと、困ったこと

※回答者：東日本大震災発生時に「自宅以外にいた」と回答した人（任意回答）

東日本大震災が発生し、外出先から帰宅後に自宅について危険性を感じたこと、困ったことを自由記述式で聞いたところ、934 件の有効回答を得た。内容を分類すると、「食器・本・照明器具等の落下・散乱」に関する回答が最も多く 174 件、続いて「家具類・家電製品等の転倒・落下」が 133 件、「建物の被害・耐震性」が 118 件などとなっている。

外出先から帰宅後に自宅について危険性を感じたこと、困ったこと（自由回答を分類）



主な回答

項目	内容	性別・年齢
食器・本・照明器具等の落下・散乱	5時間以上歩いて帰宅し、疲労がたまっているのに部屋の中の物が散乱し、片付けなければ休めなかったこと	男性 20代
	色々なものが棚の上から散乱していたこと、冷蔵庫の全ての扉が地震の衝撃で全開となり、多少冷えてはいたものの「解凍」状態になった食品があり、扉の開きっぱなしを知らせるアラート音が鳴りっぱなしになった。	女性 30代
家具類・家電製品等の転倒・落下	自宅の調理家電や、食器が落下し、ガラスや陶器が割れて散乱していた。十キロ近くの家電が頭上から落ちており、ひやりとした。	男性 50代

4 計画停電中のヒヤリ・ハット及び危害経験について

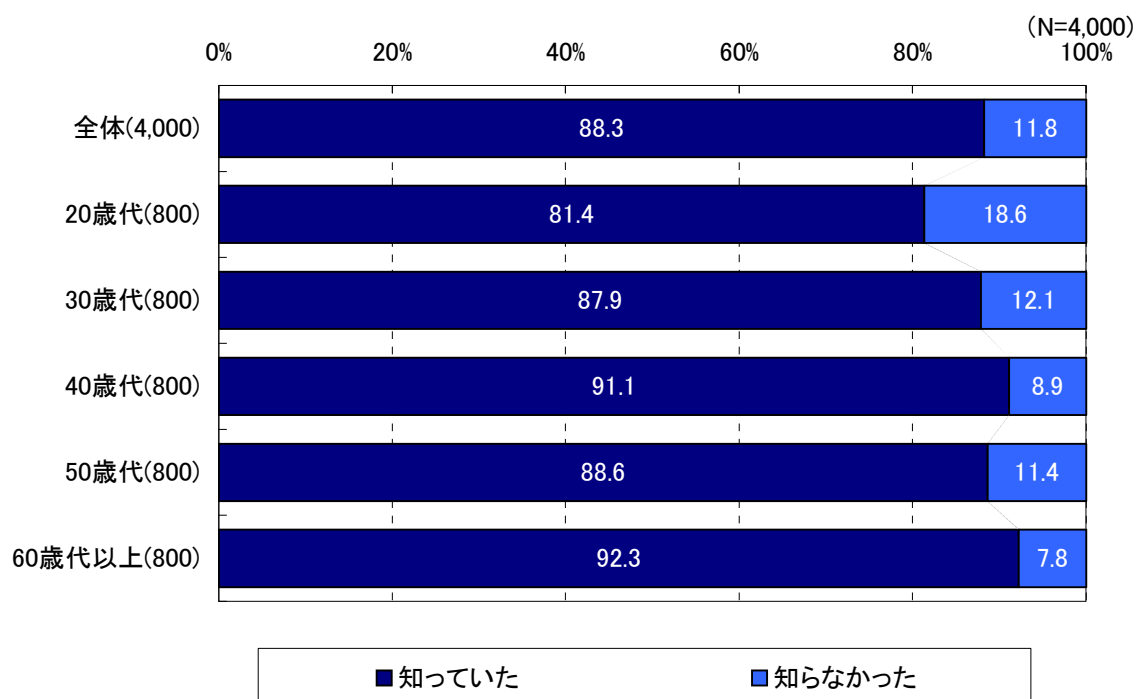
(1) 計画停電の実施に関する情報の認知度

※回答者：全員

計画停電が実施されていた時、対象エリアや実施時間などの情報を知っていたかを聞いたところ、全体では、「知っていた」という回答が 88.3%を占め、おおむね認知されていた。

年代別にみると、“20 歳代”では「知っていた」が 81.4%で、全体と比べて低い傾向がみられた。

計画停電の実施に関する情報の認知度(単一回答)＜年代別＞

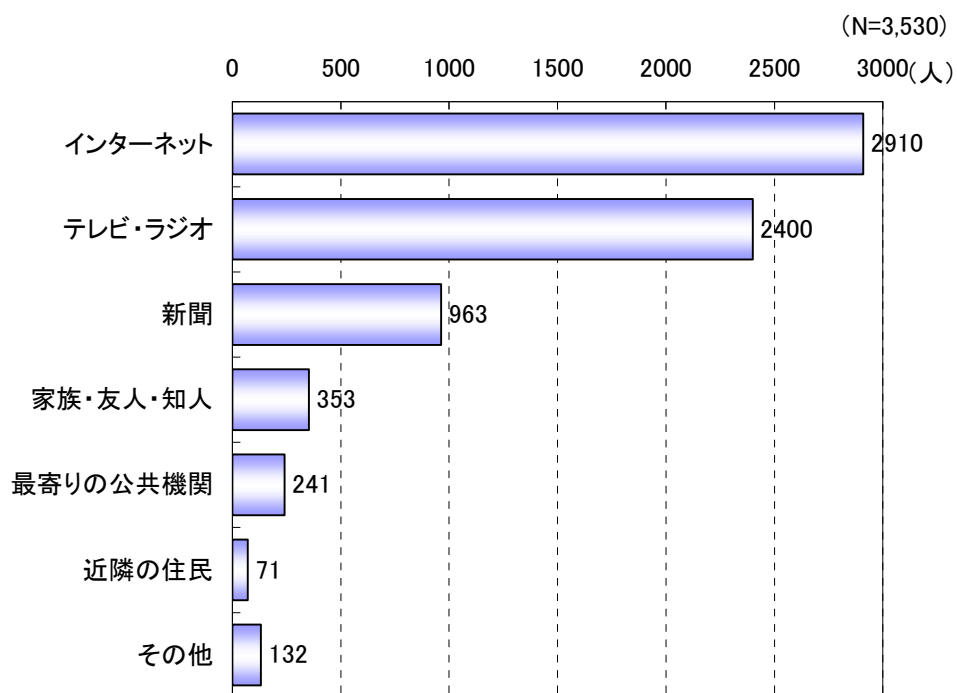


(2) 計画停電の実施に関する情報の認知媒体

※回答者：計画停電を「知っていた」と回答した 3,530 人

計画停電の実施に関する情報を何で知ったかを聞いたところ、最も多かったのが「インターネット」で 2,910 人（82.4%）、次いで「テレビ・ラジオ」が 2,400 人（68.0%）となった。

計画停電の実施に関する情報の認知媒体（複数回答）＜全体＞



「その他」の回答（上位抜粋）

Q42.「その他」の回答	件数
役所による放送	22
防災無線	18
会社	15
役所のメールサービス	11
東京電力に電話して確認した	5
役所の広報	4
電力会社からの情報	4
マンションの掲示板	4
地域の放送	3
役所のホームページ	3
ツイッター	3

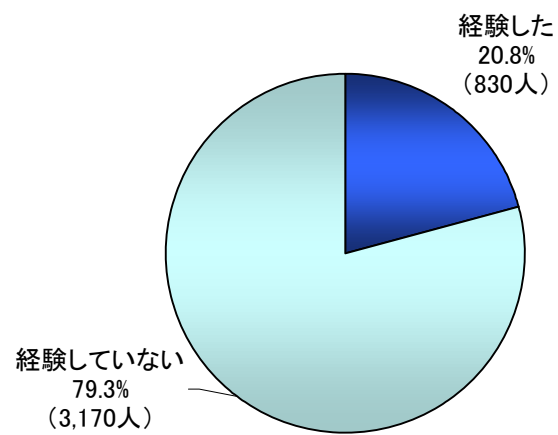
(3) 計画停電経験の有無

※回答者：全員

計画停電を「経験した」と回答した人は 20.8%であった。

計画停電経験の有無(単一回答)＜全体＞

(N=4,000)

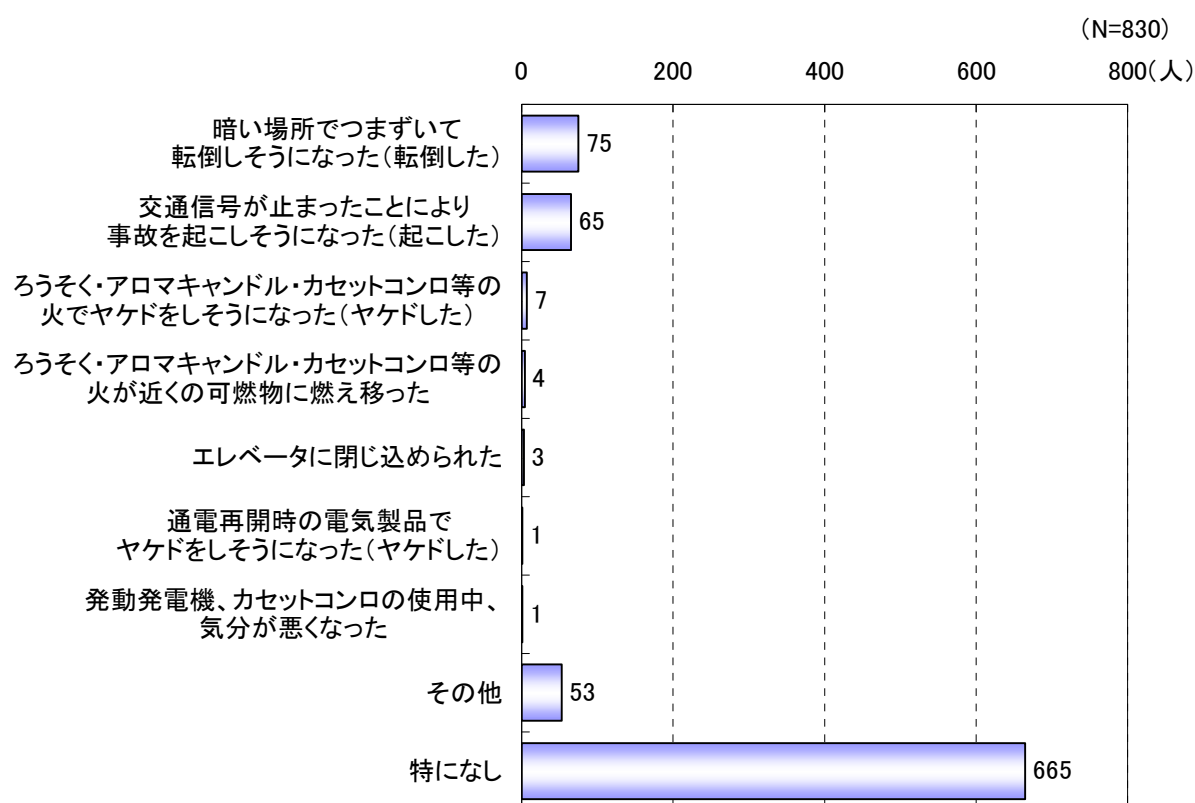


(4-1) 計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害経験の内容

※回答者：計画停電を「経験した」と回答した 830 人

計画停電が原因で「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があったかを聞いたところ、「特になし」という回答を除いた 165 人（19.9%）の人が何らかのヒヤリ・ハット経験をしていた。経験の内容は「暗い場所ではつまずいて転倒しそうになった（転倒した）」が 75 人（9.0%）、「交通信号が止まったことにより事故を起こしそうになった（起こした）」が 65 人（7.8%）となっている。

計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害経験の内容（複数回答）＜全体＞



(4-2) 計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害経験時の状況

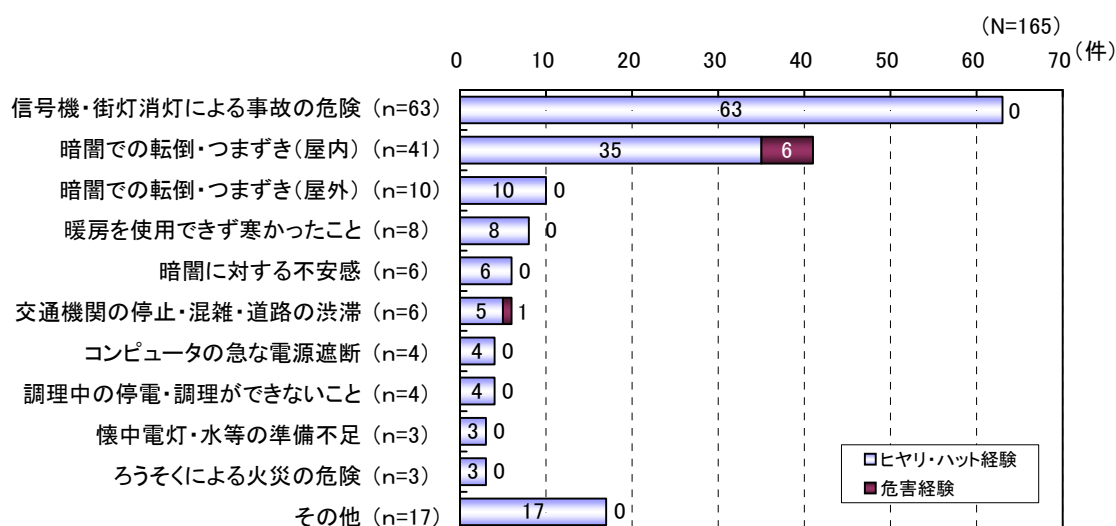
※回答者：計画停電が原因で「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があったと回答した 165 人

計画停電が原因によるヒヤリ・ハット又は危害の経験について、その時の状況を自由記述式で聞いたところ、ヒヤリ・ハット事例（ケガはしなかった）が 158 件、危害事例（ケガをした）が 7 件であった。

最も多かった事例は、「信号機・街灯消灯による事故の危険」で 65 件、次いで「暗闇での転倒・つまずき（屋内）」が 40 件と多かった。

ケガをした事例としては、『予想外の急な暗闇に何も見えず、手探りで懐中電灯を探して、あちこちぶつけた』、『停電の影響で混雑した電車の中、押されて転びケガをした』などがあった。

計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害経験時の状況（自由回答を分類）



計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害経験 主な事例

項目	内容	性別・年齢
暗闇での転倒・つまずき(屋内)	懐中電灯が一つしかなく他の家族が使っていたため暗がりの中移動したら家具にぶつかり足をぶつけた。	女性 40代
	計画時間内でもすぐに消えないので、もう少し大丈夫だろうと台所で用事を済ませていたら、急に暗くなって開けていた扉につまずいた。	女性 40代
	自営の店で、最初の停電のときは、予想外の急な暗闇(真っ黒)に何も見えず、手探りで懐中電灯を探した。その時にあちこちぶつけた。	女性 60代以上
暗闇での転倒・つまずき(屋外)	帰宅途中、街灯が消えていて暗く、側溝に落ちそうになった。	男性 50代
コンピュータの急な電源遮断	停電で、ファイルサーバーが壊れてデータを失ってしまった。	男性 50代
ろうそくによる火災の危険	計画停電中にろうそくを使用し、近くにあった紙に火がつきそうになってあせった	女性 50代

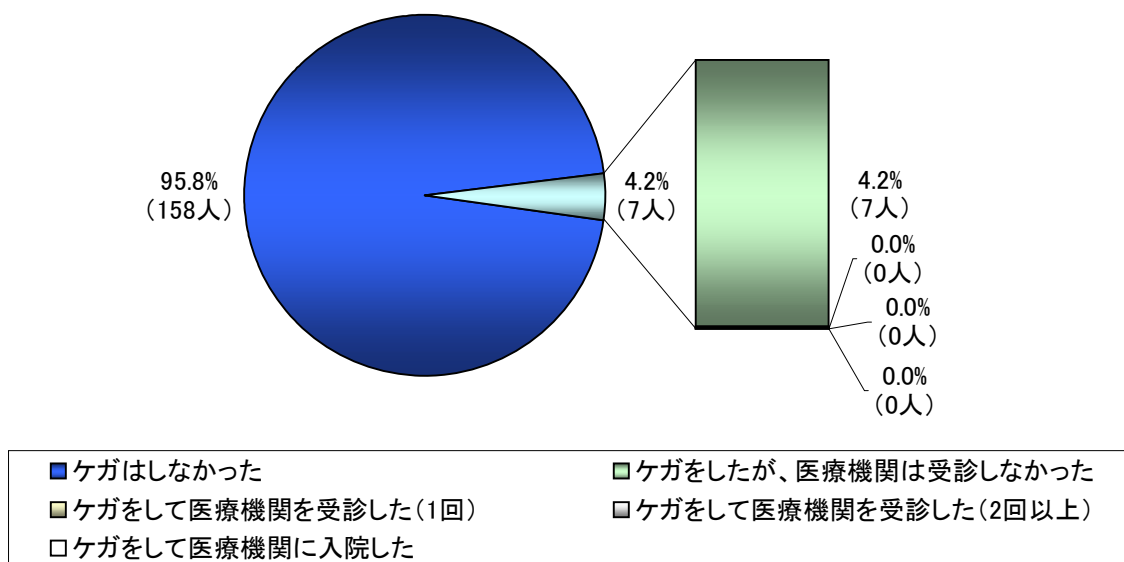
(5) 計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害の程度

※回答者：計画停電が原因で「ヒヤリ・ハット」や「危害」の経験があったと回答した 165 人

計画停電が原因のヒヤリ・ハット又は危害の経験で、ケガをしたかどうかを聞いたところ、「ケガはしなかった」が 95.8%であった。ケガをした 7 人のうち、医療機関を受診した人はいなかった。

計画停電が原因のヒヤリ・ハット／危害の程度（単一回答）＜全体＞

(N=165)



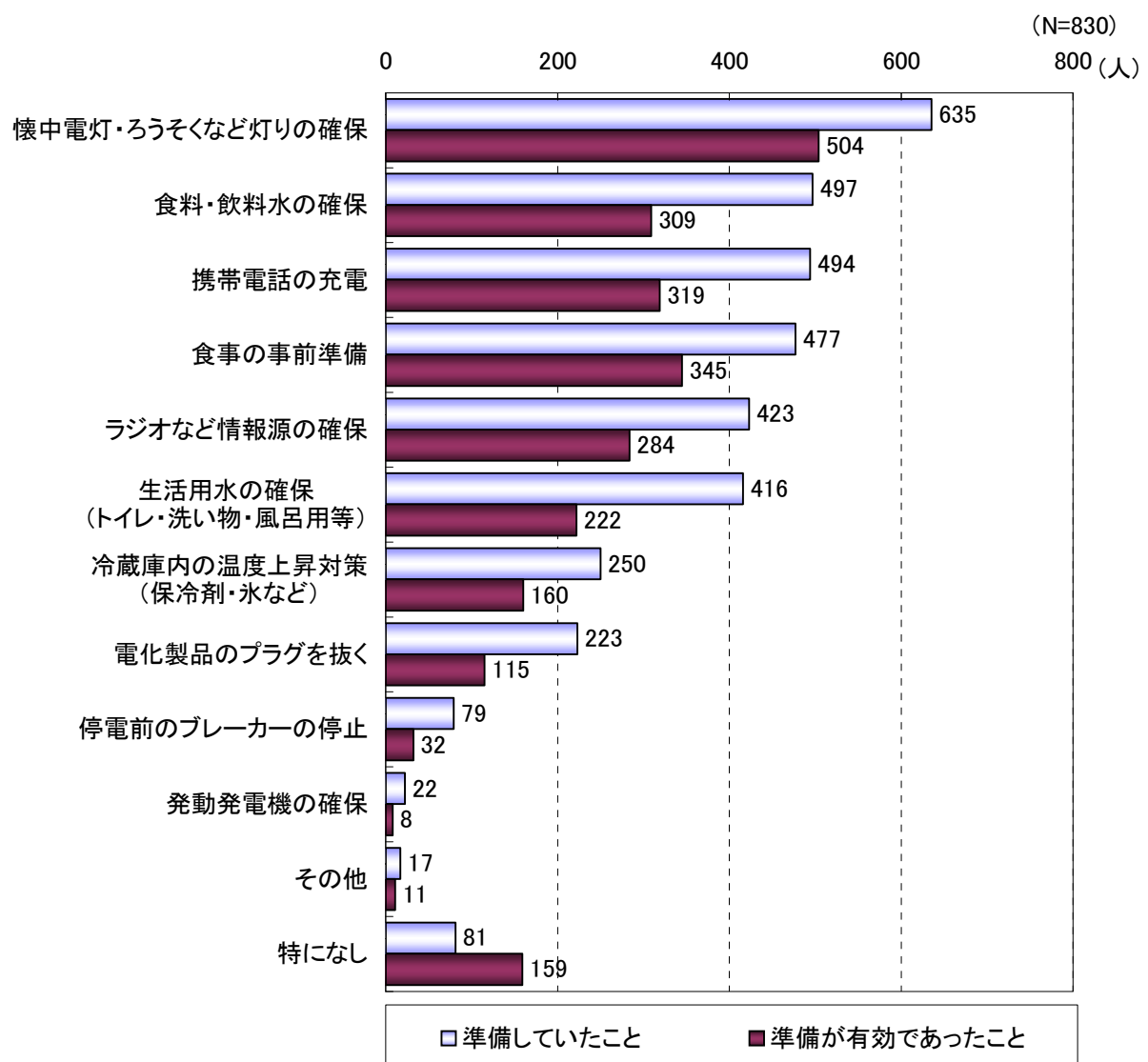
(6) 計画停電に備えて準備していたこと・停電中に有効であった準備

※回答者：計画停電を「経験した」と回答した 830 人

計画停電に備えて準備したことを聞いたところ、「懐中電灯・ろうそくなど灯りの確保」が最も多く 635 人（76.5%）であった。次いで、ほぼ同数で「食料・飲料水の確保」497 人（59.9%）、「携帯電話の充電」494 人（59.5%）、「食事の事前準備」477 人（57.5%）と続いている。

計画停電に備えて準備したことについて、停電中に有効であったかを聞いたところ、「懐中電灯・ろうそくなど灯りの確保」は、準備していた人の 79.4%（635 人）が、有効であったと答えた。続いて「食事の事前準備」72.3%（477 人）、「携帯電話の充電」64.6%（319 人）の順となっている。

計画停電に備えて準備していたこと・停電中に有効であった準備（複数回答）＜全体＞



(7) 計画停電に備えて準備をしておけばよかったと思うこと

※回答者：計画停電を「経験した」と回答した 830 人（任意回答）

計画停電に備えて準備をしておけばよかったと思うことを自由記述式で聞いたところ、334 件の有効回答を得た。最も多かったのは、「懐中電灯・ろうそくなど灯りの確保」に関するもので 121 件、次に「乾電池・蓄電池・蓄電器・充電器」の準備が 45 件、「石油暖房・湯たんぽ・カイロ等」の準備が 31 件などと続いている。

具体的には、灯りの確保については『懐中電灯は片手がふさがるし、前方しか照らさないもので以外に役に立たなかった』、『懐中電灯だけでなく、ランタンのような据え置き型の電灯があればよかった』など、ランタンの必要性に触れた回答が複数みられた。また、実施時期が 3 月だったことから、『寒かったので湯たんぽなど電気を使わない暖房器具を用意しておくよかった』という回答も多かった。

計画停電に備えて準備をしておけばよかったと思うこと（自由回答を分類）

